魔法と異界と転生者

遊里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法と異界と転生者

【Ｎコード】

Ｎ２９５４Ｙ

【作者名】

遊里

【あらすじ】

眠っている間に生活の殆どが迷宮に依存している迷宮世界に転生した主人公が、その世界では常識外のチートっぽい（強力ｏｒ小技）魔法を多様して突き進む物語です。不定期更新となりますが、楽しんで頂ければ幸いです。

第1話　ありきたりな転生ではあるのだが（前書き）

本作品はありきたりな転生モノです。処女作で文章が拙く、他者の作品と似たような描写や設定等がある可能性があり、また、チートやご都合主義、トンデモ設定、性的なものを含む暴力的な描写が入る予定ですので、苦手な方は回避して下さい。

第1話　ありきたりな転生ではあるのだが

体に激痛が走り、少し飛んで床に転がり落ちた。
少しは手加減して蹴られたのだろうが、それでも2歳児の体にはきつい。
それでも、理解した。あいつに殺気は向けてはならない、今は・・・

俺は、現在大学４年就職活動真只中、正直１０月になっても決まっていない状況だ。
周りにも内定が出ていない学生が多くいるから、焦ってはいるが落ち着いてもいる良く分からない心境。
　そして現在、深夜バスに乗っている。
これで最後と決めていた企業の役員面接を終えて帰宅している途中だ。
神経質なのに加えて期待と不安が入り混じっていてなかなか眠れない。
それでも何時の間にか眠っていた、・・・のだが、目が覚めると、女性（みたいな人？）がこちらに顔を向けていた。
それだけでなんだか安心はできた・・・が、はっきりとした輪郭も表情も見えない。
笑顔だっているのはなんとなく分かるが、声を出すことも、体を動かすこともできず、焦ったら・・・泣いてしまった。
不意にその女性に抱き上げられた。ちょっとびびった。
取り合えず泣き止むために落ち着こう。・・・・・・ふぅ。
落ち着いたら何だか眠くなってきたからまずは寝ようｚｚｚ

何度寝ても状況に変化は無かった。
これは、夢ではなく、転生・・・なんだろうなぁ。
テンプレの赤ちゃん転生。
まぁ、人生やり直したい、とか、ファンタジーな世界に転生したり迷い込みたい、と思ったことは何度かあったよ？そういう物語も好きでよく読んでいたよ？
でも実際にねぇ、自分が体験とは。
まぁ、魔法とか使えるんだったらラッキーかな。
でもどうせなら、面接に落ちて沈んだ時が良かった。
結果が気になって仕方がない。
家族や友人とはもう会えないのだろうなぁ、でも自分は、常に『人生何時死んでもおかしくない』と思っている人間だから、割り切れるはず・・・たぶん。
彼らは彼らで自分を死んだものとして処理するようになるだろうから、後はこちらの問題だろう。
事故死、なのかなぁ。寝てたから分からないか。
はぁー。
こういうときは切り替えるしかない。
あー、でもアパートの中を見られるのは恥ずかしい。
もし何かの因果であっちに帰ったりしたら、非常に気まずくなりそうだ。
いかん、切り替え、切り替えるんだ。
赤ちゃんの不満表現方法は泣くだけなんだから、感傷に浸ってたら泣いてばかりになる。
そう考えていたら、お腹が空いた。
当然泣いた。
赤ちゃんの欲求表現方法は泣くだけなんだから仕方がない、仕方がない・・・。
っ！目の前に山っぽいのが迫る！！

今の目だとまだはっきりと見えないし、小さな手だと感触がイマイチだったのが悔しい。

でも、美味しく頂いてお腹が膨れたのを感じたらひどく眠くなったので寝た。

第2話　暇で忙しい日々が続いているのだが

すげー暇だ。
体がうまく動かせないから、天上を見上げる毎日。
まぁ、目がはっきり見えるようになってから、大変満足はしている。
今眺めている母様はすごく美人で見た目はハーフエルフっぽいが、そういう種族がいるのかは現段階では分からない。
プラチナブロンドの長い髪を後ろで束ねていて目は黒色、そして耳が少しだけ尖っている色白美人さん。
胸はまぁまぁ。
そして生活内で魔法を使っていた。魔法・・・いい世界じゃないか！
母様の子である俺は、おそらく使えるはずだ、っというか武術なんて習ったこと無いから魔法が使えないとこの世界でやっていける気がしない、どんな世界かまだ知らないけどね。
母様は言葉を発せずに使っていたから、変な踊りや長ったらしい呪文は必要無さそう。
あぁ使ってみたい、某ＲＰＧの魔法の数々。
まずは魔法について研究してみてかな、こっそりと。
実はすごい魔法が使えるってので、お母様を驚かせるのが楽しみだ。
何か大事な事を言い忘れている・・・、失敬、俺の名前はユウアっていう。

やっと、やっと歩けるようになった。
長かった。
これで、魔法を練習して失敗した時に対処できる。

そして、母様が出かけた合間に魔法を使ってみることにした。

調べる事は結構ある。

・魔法が自分に使えるかどうか、どういう方法で使えるか（無言、魔法名、呪文、踊り、その他）

・魔法を使った時の障害（頭痛、精神不安定、ネガティブ、その他）

・魔法の自由度。

・どれだけ魔法が使えるか

・どうやったら魔力の最大値が上がるか

・その他

場所は台所で使うのは水魔法。

流石に今の体で外に出るのは辛いし、魔法を使った痕跡は出来るだけ無くしたいというか被害は出したくない。

取り合えず、水を指先から放出しているのを思い浮かべてみる……何も起こらない。

ちょっと焦る。

「ウォーター」

やっぱり魔法名は要るかなと思い声に出したら、出ちゃった。

「おおー」

使えたから次は・・・、次は・・・

結論として

・魔法名を頭の中で呼べば、生活に使うような弱い魔法は使え、比

較的強いのは魔法名で発動する
・魔法を使うと少しずつ頭痛がするようになる
・魔法はかなり自由度が高い。水を一定量ずつ放出した際、水を出す量で魔力消費量が決まり、また、水を操るのには出す際よりも魔力消費は少ない。使用中キャンセルは可
・レベルの低い日常的な魔法は、かなりの回数使えた
・試験毎に使い切ると魔力は上昇するようだが、レベルｕｐや神聖な場所とかで上がる可能性も捨てきれない
・精霊は今のところ見えない（精霊って重要なのに。物に宿る可愛い自分だけの女の子が、久しぶりに人間と出会って契約することになった少女が。俺って昔からロリコ・・・あれっ！？今は母様大好きになってる！）

ある程度魔法に対しての試験が終わった。

「ようやく使ってみたい某ＲＰＧ魔法を使う時が来た。水属性魔法だから水対策はばっちりだ」

現在いる不使用の部屋の床は木の魔法で若干傾いていて、一番下で外に水が流れ出るようにしてある。

「ふっふっふっ、やーるぞー、スプレッドォー」

床から水の柱が現れる。

「うわぁ、天上だぁ」

なんでか自分の足元で発動した。
ちなみに魔力は残ってませ・・・。

第3話　2年経ったのだが

2年経って分かったことは、この世界は勿論地球ではないということだ。

そりゃそうだろって突っ込みは無しで。

そういえば自分の容姿を鏡で見たところ、母様とほとんど同じでプラチナブロンドな髪が肩まであり、黒目な普通目、そして耳が少しだけ尖っていて、なぜだか頭に小さな角が二本な可愛い女の子。

子供の内は女の子っぽいこともありえるって！いずれ男っぽくなれるって！と励ましてみたり？

角については母様曰く、現代では混血化が進み、先祖返りが多いらしく、有角種はビースト（獣人）かディアボロス（魔人）かグリモア（鬼）かバハムート（竜人）あたりらしい。

竜化とかしてみたい、体が鱗に覆われて……（結構蛇とか好きなのです、可愛くない？）

ところで、俺の名前覚えてくれているだろうか、ユウア・Nハだ。

名前が出る機会が少ないのは気のせいだ。

Nハはノインハーミルと呼ぶ。

自国名ノインのローマ字の頭文字と村名ハーミルのカタカナの頭文字が後に来る。

母様の名は、トリスタ・EテNハ。

そういえば父親については何も知らない、合ったこともないし・・・。

母様とした男だから一発は殴りたい、一日一発でも一時間に一発でもいい。

この世界の言葉と文字についてだが、言葉は日本語だが、文字は・・・どうしてこうなった。

名詞がカタカナで動詞と形容詞がひらがな、助詞とその他がローマ字（小文字）と、ごちゃごちゃだった。
必要文字数多すぎだろ、ローマ字不要だろ、『分からないよりいいだろ』何か聞こえたような。
でも文字とか知っていることを、知らない振りして教えて貰うのは難易度が高いし、子供の記憶力うんぬんが使えないのは少々残念。
文字を知ったのは家にあった本のおかげ、といっても家にあった五冊の本の内四冊が宗教本って・・・。

一つだけラクレハ神（この世界の神）と自然（迷宮）に敬服するのがあって、勿論日本人っぽく無宗教貫き型を目指す予定なのだが、無宗教アウトならそれを選ぶ予定にした。
そう、この世界には至る所に迷宮があり人々の生活は迷宮に依存しているらしい、でもそこまでしか分からなかった。
他は、胡散臭いというか、もろ悪徳商法じみたものや、神が初めて降り立った土地を聖地として崇めろとか、俺が神だ崇めよとか。

最初のにはこの世界についても書いてあった。
今いる大陸はテトラリス。形状は残念なことにひし形だ。
この国の季節は春を表すハーレ、雨季のレイク、ハーレより少し暑い夏のクーラ、ハーレよりかなり寒いが雪は山しか降らない冬のランタ、最後に神日ラクレハで最初に戻る。
この世界のラクレハって名前から四季の名前を決めたのだろうか。
一季節９９日と神日４日の４００日で、神日中は迷宮に入れないらしい。

そういえば母様への暴露を何時しようか。
こういう転生系の場合は、暴露しても受け入れてくれる物語が多いが、それでもやっぱり慎重に行動しておくべきだろう。
俺の苦労はなんだったんだってのを目指すべきだ。

苦労で思い出したが、辛い乳離れの後に待っていた食事で泣きっ面に蜂状態だ。
主食は鉄板で焼いた硬いパンで、適当に切ったサラダに岩塩を掛けたもの、ステーキも勿論塩味、野菜スープも勿論・・・。
結構我慢できないレベルだが、慣れたというか母様の手作りだから食べ続けられる。
本も無い、外にも出られない、実はまだ他の人と会ったことも無いから、これ以上知ることができないってのはどうしたものか。
母様は元冒険者らしいのだが、語り終わりに基本沈むので聞かないことにした。
何があったのか聞けるわけがない。

何にせよ、武術なんてやったこと無いから魔法の特訓でもして最強系魔法使いを目指そうと思う。
そして母様と一緒に旅をし、守れるよう夢見て・・・。

第４話　今後の方向性が決まったのだが

ホントたまに家に男がくるようになったのだが、母様は帰って来るのが分かるのか、俺に見せてくれる笑顔が段々崩れていく。
日常で母様をずっと見てきたからその変化を感じとれた。
そして俺を別の部屋に置いてその男のいるリビングに行き、すぐに二人で家を出て行く。
かなり長い外出で、考えても仕方ないし暇なので、魔法練習してた。
帰って来た後の母様の表情はすごく暗い。
あいつと何をしていたのか分からないが、俺と母様の時間を奪うなんて許せない。
マザコン？
誇って言える！！

今日は母様の機嫌が悪くなってきている。
あいつが来るのだろうし、禁止はされていないから一応どんな顔なのか拝んでやろう。
そうして母様がリビングに行ったのをそっと追いかけて行った。
扉は無いのでそっと覗いてみたら、チンピラとゴロツキを足して二で割ったような中途半端な顔立ちの男が丁度母様を殴った場面だった。
その瞬間殺気を立ててしまって男に気づかれた・・・。
それほど怖い顔では無かったが、体が真正直に震えてしまって動けなかった。
そうしている内に近づいたあいつに蹴られ、第１話冒頭に戻る。
この体で初めて、ではないがベスト３に入る程の激痛で、普通の子供だったら、トラウマものだろうが、前世ではこの程度何度も受

けたことがあるから冷静にはなれる。
この体じゃ勝てないのは分かっているから殺気は納めるべきだが、ガキの殺気にキレる？ビビりか？殺るか？

「やめてくださいっ」

考えていたら母様がそう言って男に言い寄ったが、その母を男は殴りつけた。
我慢我慢・・・。

「俺に指図すんじゃねぇ、この奴隷がっ、そいつは商品なんだからしっかり躾けておけって命令しただろうがっ」

もう一回母様を殴った。
がま・・・「母様がこいつの奴隷？俺が商品？・・・はっ？ふざけるなっ！！」っと言いたいが、殺気　立てる毎にこいつは俺と母様を殴りそうなのでぐぐっと我慢していると、母様は反論した。

「買ってもらう予定の貴族は自分で調教したがる方々ですから、ある程度の反抗心は持たせておくべきです。予定通り１０歳になったら大金と貴族との繋がりを得られるのですから、この子の躾は任せておいてください」

母様が俺を商品として・・・、いや、でも母様が何時も俺に向ける顔は母としての顔そのもの。
それでも、母様が俺を商品だと言うのならば俺は受け入れられる、かもしれない。

「ふんっ、８歳にする、それまでは待ってやる。それと、攻撃魔法を覚えさせたりしたらすぐに奴隷にして売るし、俺には殺気を向け

ないように躾けろ」

「あぁぁぁぁ・・・・・・・」

母様はしゃがんで頭を抱えて苦しみ出した。

「ふんっ！」

「お母様っ」

男が家を出て行ったのを確認して、しゃがんでいる母様を抱き締めた。

「8歳・・・」

母様も俺を抱きしめ返して幾許か経って母様はそう言った。

8歳で貴族に売られるのかぁ。

でも男である俺って商品としてそんなに価値あるのかなぁ。基本女の子が妾とか性奴隷としてってのはテンプレだが、売り先がキモい奴だったらやだなぁ。

そう考えていると、急に母様に強く抱き締められた。

「ごめんなさい・・・、貴方を・・・」

泣いているようで、うまく聞こえない。

まだ蹴られた痛みが残っていて痛いが、母様の痛みも辛さも何を言ったのかも分かるから、俺も泣いた。

「あと6年位は一緒にいられます。売られてもいつかきっとまた会

えます。だからっ、泣かないで、ください・・・」

そう、正確には5年と2季ほど。

いや貴族に紹介される前だな、それまでにあいつをどうにかすれば母様は解放されるはず。

準備期間は十分かは分からないが、奴隷契約についてとかいろいろ調べよう。

主人は奴隷に予備動作らしきもの無しで、苦痛を与えられる可能性が高いから、俺の行動も気をつけなければ。

いつの間にか母様が俺をじっと見つめていた、何か恥ずい／／／

「貴方なら・・・、そうね、立派な淑女になる為に本格的に教え始めましょうか・・・。」

えっ？淑女？？？

第5話　数年間色々と学んだのだが1

色々学んだので、まとめてみた。まぁ読むのメンドい奴は2話ほど飛ばすのだ。

ユウア・Ｎハ
ノイン王国ハーミル村で生まれた転生者。母親はトリスタン・ＥテＮハ。プラチナブランドの髪が肩まであり、黒目な普通目、耳はちょっとだけ尖っていて、頭に小さな角が二本。全然男っぽさが育たない。魔法は生活用が完璧、理由あって母様が居ない時に攻撃用魔法を自主錬していて、魔力総量は母様曰く「あと数年したら私を超える」とのこと。さらに前世よりも格段に筋力があってチートもどき。朝は家裏のガルムの森で戦闘訓練、帰ってきてからは淑女目指して特訓中。ガルムの森しか言ったこと無い。会った人は片手で数えられるほど。

トリスタ・ＥテＮハ
エストラ帝国テリア村出身で、現在ノイン王国ハーミル村在住の年齢不詳の俺の母親。髪と目の色と耳は俺とお揃い。強つり目で胸はまぁまぁなすごい美人。ハーフエルフってイメージ。お母様と呼んで（崇めて）いる。昔は冒険者だったが、今はあいつの奴隷。いつか一緒に冒険したいし・・・。生活魔法は完璧。最近は母様の魔力を母様の魔力だと認識できるようになったが、やはり大きい。低く見積もってもあいつが1に対して10万以上かな。料理の腕は・・・、他人にはお勧め出来ない。未だに一緒に寝ている。

あいつ
塵。

村長

いかにも村長って感じのバーコード村長で、髪の色（青色）と量以外普通の人間ぽかった。俺が母親以外で唯一見たことのある他人。

言葉と文字

言葉は日本語が普通に通じる。文字は名詞がカタカナで動詞と形容詞がひらがな、助詞とその他がローマ字小文字と、ごちゃごちゃだった。まぁ、分かるからいい。

名前と名字

名前の後に、国名の頭文字（ローマ字大文字）と村の頭文字をカタカナで付ける。貴族と王族は村人や町人と違って、家名のローマ字小文字とローマ字大文字が、それぞれ国名の次に付く。

ハーミル村と我が家

現在住んでいる村だが、俺の住む家は隣家が見えないほど外れに有る。家裏にはガルムの森があってさらに奥に山が見える。他の村や町に行くには迷宮を通らないといけないらしい。家は木造で、リビングと台所と5部屋と、2人暮らしには広く、元実家と同じくらいだ（田舎ですから）。当然ではあるが風呂は無いし、台所には必要最低限の道具しかなく、水と火の魔法で調理している。

ガルムの森

迷宮。一番強いのがガルムだからそう呼ばれている。ガルム、ウルフ、フラワー、ホーンジャッカル、モス、コインで、コインが最弱だが偶に高レベルなのが出る。単体なら簡単に倒せるようになった。コインなんて直径２０ｃｍのコイン状魔物で、一発殴れば倒せる弱さだが、高レベルになると大量に湧いてさらに強力な魔法を一斉に使ってくることもあるらしい。こいつらはお金をかなり落とす。

ノイン王国と王家
俺が生まれ住んでいる国でテトラリス大陸の北部に位置している。現王はエディルグランド・ＮＮ。ノルディラク家。息子２人と娘３人いるらしい。

他三国
ひし形のテトラリス大陸には、母様の出身地のエストラ帝国（東）とサウザンド王国（南）、そしてウェルミナ公国（西）。大陸の真ん中に大きな山がある。エストラ帝国は、強者の統べる国で、サウザンド王国は気候がかなり穏やかで一定、ウェルミナ公国は権力と金がごってごてな人間主義国家。

王国間の情勢
迷宮が主な理由で、数百年は戦争を行っていない。その代わりに、国対抗の闘技大会があり、賞金に加えて貨幣のレートが決まるらしい（国によって魔物が落とすお金が違う）。学生個人・学生団体・一般個人・一般団体・騎士の五つの大会がある。代理戦争ってこと。全部勝つとすごい通貨価値となるが、毎年リセットされているので、一国が突出していくことはないし、勝つことによる小さなデメリットも有るらしい。

貴族
カドレア家、ロンディア家、ラスティ家が俺の売り先候補。ラスティが一番マシで、娘用の人形を欲っしていて、うまくいけばその娘と・・・とのことだ。捨てられるか壊されるのがオチだろうけど。

学校
各国に４つずつ存在し、平均６年で卒業で、８歳から２０歳までなら学費不要で入れ、生活費はクエストで稼ぐことができる。国としては迷宮での冒険者の稼ぎと、闘技大会で勝つ方が有益な為、出来

る限り多くの国民を入学させるようにしているらしい。

ノイン王国の硬貨
鉄貨・銅貨・銀貨・金貨・晶貨で１００枚で上位の硬貨と同じ値段。
ノイン王国の単位はノット。鉄貨一枚１円ほど。

種族
ヒューマン、エルフ、ドワーフ、クラッズ（小人）、フェアリー、ビースト（獣人＝犬・猫その他）、セレスティア（翼人）、ディアボロス（魔人）、グリモア（鬼）、ババムート（竜人）、その他が居たらしいが、混血化がかなり進んでいて、現在では見た目では分かりにくい。どこかに純潔種の集落が存在しているとかしていないとか。

第6話　数年間色々と学んだのだが2

魔法

見たことがあるのは母様の生活用魔法だけ。小説の魔法モノでは原理が理屈っぽく語られていることが多いが、この世界ではどうなのだろうか。前回の調査では、

・魔法名を頭の中で呼べば、生活に使うような弱い魔法は使え、比較的強いのは魔法名で発動する

・魔法を使うと少しずつ頭痛がするようになる

・物質の発生量で魔力消費量が増え、操作の消費量は少ない。途中キャンセル可

・現在母様の3／5位の魔力総量

・魔力最大値は使い切りと戦闘（レベルup?）で上昇

・精霊は今のところ見えない

だったが、他にも色々分かった。存在する物体を利用した場合は消費量が少ない。つまり、水を発生させるのと、大気中の水を集めるのとでは後者の方が割がいい。っというか、水を発生させることが出来るのなら、他の物も発生できるんじゃね？ってことで、「トルエン（シンナーの匂いの元で分かりやすい匂いだからこれに決めた）」って言ったら、匂ってた。成功だ。静電気でパチッとしたら盛大に燃えて危なかった。材料となる炭素と水素を含む物質から作り出すことも少なめの魔力で出来た。空気中の二酸化炭素と水からも合成可能ってわけだが、金属は出せなかったし（何故かは分からん）、元理系としてはこんなに簡単に出来ても正直凹む。こういった前世の化学に準ずる魔法を原理魔法と呼ぶことにした。この世界の魔法は火・水・風・土・木・雷・氷・闇・光・空間の属性として認知されているので、こっちは属性魔法。それらは発現魔法（無い物を作り出す魔法）と実在魔法（在るものを使う魔法）って感じで分類した。まぁ分類しても余り意味は無い。魔力の自然回復量は個人によ

る（俺は半日で全快）。他には特異魔法というのがあって、特定の人のみが使える魔法があるらしい。

髪と目の色

髪は属性の色に関係あり、自分の魔法適正属性色が混じって現れる。白・黒・銀・金系は全属性を操れる（なんでもできる）ためか、貴族や王族に多い。目の色は基本皆黒らしく、黒目であればギルド登録もしくは学生になるとマッピング、アイテムボックス、ワープ（攻略した迷宮の出口または入口に転移可能で、迷宮内ならどこでも使用可）、フロー（浮遊）、アナライズ（アイテム解析・鑑定）の空間魔法が魔力無しで使えるようになるらしい。便利すぎる。ワープは個人専用なので、戦争するためには相手国までの道のりにある迷宮全てを攻略しなければならない（さらに他国の迷宮に入るにはギルドに申請しなければならない）という面倒くささで、戦争にまで発展させるのが難しい。

季節と気候

春を表すハーレ、雨季のレイク、ハーレより少し暑い夏のクーラ、ハーレより少し寒いが雪は降らない冬のランタ、最後に神日ラクレハで最初に戻る。一年は一季節９９日と神日４日の４００日で神日中は迷宮に入れない。ラクレハの２０日程前に闘技大会があって年が終わるって感じだ。

迷宮と魔物

いろいろな所にあって、見た目小さな平原でも足を踏み入れたら、広い迷宮になるそうだ。脱出したら数メートルしか進んでないってことも・・・。迷宮は季節ごとに道が少し変わり、神日が過ぎると道が大きく変わる他、魔物も変化する。さらに、一度攻略した迷宮は、それから一年過ぎるとワープできなくなるそうだ。母様は、神様が『人が日々の努力を怠らないように』という理由で迷宮を作っ

たってのが最有力だって言っていた。ちなみに、動物　魔獣≠魔物　植物その他（魔獣と魔物は統一して魔物と呼ぶが、必要な時は分ける）で、魔物は倒すとアイテムやお金をドロップして地面に沈んでいき、強い魔獣のほうが美味しい肉・武器・防具・アクセサリーを、強い魔物は美味しい野菜・調味料・服を落としやすい。野菜とか果物は迷宮内に群生していることが多いが、迷宮以外で育てると美味しくなくなるそうだ。食用家畜も当てはまるらしい。人々の生活が迷宮に依存しているってのはこれらの為だ。

ギルド

『ギルドは神聖にして侵すべからず』って言葉があり、ギルドに対して不正したりした人は・・・。ギルドカードは身分証明書代わりで１２歳以上で加入可、若しくは学校を卒業する際ギルドカードが貰える。母様のギルドカードには名前、ギルドランク、預金（本人のみ見えるらしい）が載っていた。母様はＳＳランクだったさすが母様。ランクはＦ・Ｅ・Ｄ・Ｃ・Ｂ・Ａ・Ｓ・ＳＳ・ＳＳＳ・ＥＸまであるらしいが、筋力とか魔力が載っていないため、カードを見ても何が強いかは分からないし、依頼達成で上がるためそもそも強いかすら分からない。

料理

塩味。ガルムの森ではなぜか岩塩しか調味料が手に入らない。結構我慢できないレベルだが、慣れたというか母様の手作りだから食べ続けられる。

宗教

本を読んだり母様から聞いたことから考察すると、始まりはエストラ帝国で神と迷宮を崇めるような物だったが、能力上一番弱いヒューマンが集まって、王の元で人間用の宗教を作り纏めてウェルミナ王国ができた。だがそこでクーデターが起こって権力を欲った奴

らが、王族を追い出し自分たちに都合のいい宗教へと変化させていって名を公国へと変えた。元の王族はそれぞれ北と南で失敗を生かした国を作った。宗教の中身は面倒臭いから略。

奴隷

奴隷の烙印を肩に付けている。特異魔法にあたり、主人の意思で売買可能。主人が死んだらギルドか親族に引き継がれる。自分が奴隷になる可能性もあるからと教えられた。

こんな所だ。

第7話　成長に問題があるのだが

数年間でほとんど基本的なことを覚えて身に着けたのだが・・・、見た目共々完璧な淑女になってしまった。
自分の顔を見ていると正直惚れそう、というかこのままでは『男の娘』になってしまう。
・・・悪くはないが、自分の姿を見ても自分じゃない感じだし、自分と認めたらナルシーになりそう。
勿論、素と淑女は切り替え可能である。

何で淑女なのかあの後聞いてみたのだが、

「そのほうがかわいいし、何より殴られる事が少なくなるからよ」

「・・・でも貴族に売られた後発覚したらどうするのですか？」

「それなら大丈夫よ。数人可愛ければ良いっていう人を知っているから」

「・・・」

と言う会話があった。

今思うと、母様の言葉は冗談っぽかったような気がする。
なぜなら魔法を教わるときに、一度で成功したら母様の目に一瞬宿った暗い光？
それを肯定するかのように魔法を鍛錬するように言われた。
一通り生活で使う魔法を習得して見せた後に言われたのだから、

それ以上の鍛錬となるとあいつが教えることを認めていない戦闘用だが、教わっていないのだから命令通りではある。

昔からやっていた某ＲＰＧの上位魔法までなら使えるようになったし、他の魔法も結構使えるようになったし、原理魔法は・・・正直卑怯だから、奥の手にしておいて極力属性魔法を使うようにしよう。

使い勝手が悪そうなＲＰＧ系属性魔法は流石に改良したから、あとは魔力の底上げのみだ。

そういえばガルムの森でまたやってしまった。

何をやったかというと、とある魔法だ。

思いつきで即実行した「メテオスウォーム」って。

もう某ＲＰＧの名前、分かる人には分かるだろう。

言って空から隕石が落ちてくるのが見えた。

隕石ってアレだね、でっかいクレーターができるほどのエネルギー持ってるんだよねって思った瞬間、本気で逃げた。

走りながら使った耐衝撃防音魔法と風による補助魔法でどうにか、生きていた。

危なかったーーーー。

いやー、森が森じゃなくなってたのはびっくりだ、ほとんど人が入らない森でよかったよかった・・・。

クレーターの中には大量のドロップアイテムがあって、持ち帰るのにも一苦労した。

話題を変えるが、母様にはどうやらＮＧワードが設定されているようで、その言葉を言おうとすると激痛に見舞われるようで、何度か倒れたり熱が出ることがあった。

その都度あいつに殺意が湧いたのだが、お母様のお世話～は嬉しかった。
最も、一つのことを教わったら十以上のことを学ぶ（知っている）素振りを見せることによって、倒れる頻度は減っていったが、母様の目が正直怖いレベルにまで達する時が出てきた。
それでもあいつの前では一切見せない。
流石の演技力だ。
俺も淑女力を見せつけてやった。
あの時のあいつのニヤケ顔ときたら、キモくてキモくて、苦痛で歪めてやりたかった。
母様も望んでいるのだろう、あいつの死を・・・。ならば俺は・・・。

7歳半になった。

相変わらず身体に男っぽさが出ないから受け入れた。
ガルムの森でも、ガルムの群れを上位魔法一発で倒せるようになったし、この年で母様の魔力総量を超えてしまった。
あいつは魔力を感知できないようだが、不安になるほどの上昇具合だったので、母様が封印の魔法を掛けてくれて、母様と同じ魔力量になった。
何故か自分で自分の魔力を封印することはできないため、封印は他者に行ってもらわなければならない。
それと、あいつが帰ってくることが前日までに分かるようになってしまったので、Xデーは間近に設定してある。
決行前には母様に自分の事を話そうと思っている。

自分の想いも全部含めて・・・。

第8話　何も無かったのだが

夜、未だに一緒に寝ているベッドの上、

「母様、お話があります」

「何かしら？畏まって」

何時もと違う事を悟った母様はそれだけで明日何が起こるか理解できたようで、希望で目が潤んでいるようだった。

あの母様がこれ程まで分かりやすい反応とは・・・、よっぽど待ち望んでいたのかな？

「僕についてです。母様は僕が異常だとは思いませんでしたか？」

以前からどうやって切り出すか迷って、この言葉を選んだ。

「そうねぇ、正直、そう思ったわ。時々私が分からない単語を話すし、物覚えも早い、というよりは既に理解しているようだったし、私がいない間にどこで学んだの？」

さすが母様、鋭い。

「理解するのは簡単でした。前の世界に似ている事が多かったですから」

「は？」

母様であっても予想外だったらしく、唖然としている。

「記憶を持ったまま転生してきたのです」

それから、前世の自分と転生してきてから自分が元居た世界に共通することが多く、学ぶのには苦労しなかった事などを告げた。

そして、

「私はお母様が好きです。息子ではなく一人の男として。そして一緒に冒険したいです。ですから明日・・・」

それ以上は言葉に出来ない。あいつに知られる可能性は極力低くしておかなければならない。

「ふふふ、複雑ね・・・。息子が転生者で、私が好きで・・・」

やさしい母の顔そして女性の顔、どちらも目の前にあった。

「確かに貴方から向けられる眼差しに男としてのそれを感じる時が何度かあったわね。体を拭いてもらっている時とか一緒に寝る時とかも、ね？」

やっぱり母様には敵わな・・・母様に頭を撫でられた。

「顔が赤いわよ、ユウア」

言われてすごく火照るのが感じる。

「こんなにウブで可愛いと将来が心配で仕方がないわねぇ。そうだ・・・名前・・・、教えて貰える？」

「今は・・・できません。全て終わらせてから・・・でいいですか？」

少し残念そうにしている母様。

「そう。でも前世の記憶があるなら、生活に不自由させたかしら？」

「お母様が居てくれたので全く思いませんでした」

即答したが、「本当に？」と返された。

「お、お風呂が無いのと料理が塩味のみなのは正直つらいですっ」

「正直ね、本当に・・・、私の・・・子供には勿体ないくらい・・・」

反論しようとしたが強く抱きしめられて、何も言えなくなった。

「私は貴方の母で、なのに商品として育てていて・・・、それでも貴方は分かっていて私を好きでいてくれる・・・。でも私は・・・貴方の想いに応えることは・・・」

分かっていたことではある。

今はそれでもいい、今は・・・。

二人は長い間抱きしめ合っていた。

第9話　その日が来たのだが

作戦、と言うには頼りないが、俺はあいつが家に入るためにドアに手を掛ける直前に、思いっきりドアを開けてぶつけた。

「っ！」

あいつが頭を手で押さえながらこちらを睨んでいる。

「ご、ごめんなさいっーーー」

怯えた素振りを見せて、ガルムの森へと駈けた。

「待ちやがれこの餓鬼！」

しばらくしてあいつが俺を追いかけてきた。
単純そうな奴には単純な作戦をだ、・・・単純で良かった。
まぁ、失敗してたら母様が焚きつけてくれていただろう。

「ユウア・・・」

家の裏側で、ガルムの森が見える様に、帰って来たユウアが発見出来る様に、トリスタは佇んでいた。

森の中には魔物が倒されてドロップしたアイテムが所々落ちてい

た。

「やっぱり餓鬼だが、逃げる短期間でこれだけの魔物を倒しているとなると少し不味いか。あいつめ、帰ったらたっぷりお仕置きしてやる。まぁ、この程度の森で強くなった所で高が知れているし、餓鬼に高度な魔法なんて使えるはずがねえ」

アイテムを道しるべとしながら、自分の武器（剣）を取り出し、にやけながら進む。

ある程度進んだ所で突然小雨が降って来た。

「なっ、迷宮で雨が降るなんざぁ、余りねえ、魔法か？いや、痛みも何も・・・っ！」

突然強烈な鼻に刺さる臭気に見舞われ息が出来なくなった。

「レイン、・・・ＴＦレイン」

放った魔法は単純ではあるが、知らなければおそらく防御不可能な魔法。

最初はただ単に雨を降らせる魔法『レイン』、そしてひとコマ置いて発した『ＴＦレイン』はＴＨＦという溶媒を降らせる魔法。

知っているだろうか？

クロロホルム（略名クロホル）は眠らせる液体として認知されている事が多いが、事実無根であり、クロホルを染み込ませた布を口に当てられたらまず噎せてもがき苦しむ。

その暴れるのを抑えて当て続ければ、落ちる可能性はあるって程

度だ。
まぁ、発癌性云々で余り嗅ぎたくない匂いではある。
それに対して、理系なら知っている可能性は高いだろうが、ＴＨＦ（正式名称はテトラヒドロフラン）はクロホルよりもやばい。
匂いは言葉に表せないが、少量溢しても気化して結構悶えたことが何度もある。
それが大量に降って来たのだから、自分としては「ご愁傷さま」と言いたい所だ。
だがこれだけではまだ終わらない。
隠れていた木から出てあいつに有る程度近づいたところ、あいつは膝と剣を持つ片手を地面に着けてもう片手は口を押さえていた（リアルｏｒｚ）。
「ウッドグレイブ」
そう言い放ち、尖った根っこが悶え耐えているあいつの手から肩にかけて貫通した。
「！？ーーーー！ーーー？」
流石に息が出来なくてパニくってるやつには抵抗すら出来ず、言葉も出せず、痛みはそれほど感じてなさそうだ。
「ウッドグレイブ」
本数を増やして使ったその魔法で発生した尖根が両方の膝、腹、開いていた口から頬を突き抜けて生えた。

「つまらない。何でこんな奴が母様を・・・」

森に入った後は比較的簡単に終わらせられると思っていたが、本当に速攻で終わってしまった。

「でもまだ生きてるなんてゴキ並みのしぶとさだ」

と言いつつもＴＨＦの液体を少量当て続けている。
ＴＨＦは傷口に触れるとすっごーーーーい浸みるんだよねぇ。

暴れたせいで肉が裂けて傷口が広がり血がそこから溢れ出す。

おっ、迷宮の奥の方からガルムの群れが出てきた。
ガルムの為に、すかさず空気を送ってＴＨＦを吹き飛ばし、入口方向に進んであいつを見た。
ガルムは動かせないあいつの足や腕を引き千切っていた。

「ガルムに食い殺されるなんて、あいつにはお似合いだな。でも念のためにロックスタンプ（遅効型）！放置プレイでさようなら～っと、早く母様の所に」

一分後に上から落ちてくるよう設定した岩石を残して家に帰り急いだ。

第１０話　大切なものを失ったのだが

「エアリアルアシスト・・・どけっ、ブラストウインドっ！」

目の前に現れる魔物を突風で吹き飛ばしながら、入口を目指す。

あいつを追いやった罪悪感なんてない。

人を殺した弊害がいずれ出る可能性もあったが、慎ましく母様と暮らしていければそれでいいんだ、後は何もいらない必要無い。

そう、ここから、母様との新しい生活が始まるんだ。

希望を胸に、俺は迷宮を駆けた。

迷宮から家の裏に出た所で、母様が見えたが、母様は頭を抱えて膝を突いていた。

「お母様っ」

駆け寄ると、母様の顔は苦痛の中で何とか笑顔を作っていた。

「終わった・・・のね」

「どこか痛いのですかっ？何かあったのですかっ？」

そう言うと、母様は昨日のように俺を強く抱きしめたが、・・・余りにも力が無かった。

「死ぬ時が・・・来たのよ」

「何で、何で母様が死なないとならないのですかっ？」

「言って・・・無いもの。奴隷の主人が・・・選べる選択肢・・・死んだ際苦痛を奴隷に与えて・・・殺せる」

「そんなの聞いてないですっ。何で言「貴方に言えば・・・叶わない・・・私の望み」」

「っ！お母様は僕と一緒に居たくなかったのですか？」

「そんな訳ないっ」

「ならっ「私は・・・貴方の未来に・・・居てはならないほど・・・」」

知っている。

母様があいつのお金の為に体を売らされていたことを・・・。

涙が溢れてくる。

どうすればいい？俺は何をすればいい？

「それでも「うぐっ、」母様！？」

「聞いてっ・・・私自身が・・・もう耐えられなかった・・・貴方の成長は・・・楽しみだった・・・けれど・・・決めた・・・貴方が普通の子供・・・じゃないと分かって・・・奴隷は自分から・・・死ねない・・・だから・・・それにもし・・・失敗したら・・・これまで以上に・・・これが昨日・・・貴方の想いに答えられなかった・・・理由・・・本当に昨日は・・・迷ったのよ？」

「母様・・・」

母様は抱きしめていたのを解いて、俺にキスをした。
温かい何かが体に流れ込んでくる、その途端に母様の体から力が抜けて倒れ掛ったのを体で受け止めた。

「母様？」

「ありがとう・・・貴方が私の・・・子供で良かっ・・・た」

母様は俺に抱かれて逝った。

「はは、さま？母様！お母様ーーーーーーーっ」

夕暮れ時、大きな叫びが静寂を切り裂いた。

第１０話　大切なものを失ったのだが（後書き）

閑話ののち学校編に移りたいと思います。ご意見ご感想お待ちしております（忙しいので返信は殆ど出来ないですが）。

閑話　私の願い・・・1

私は冒険者だった。
かなり知名度もあり、いい仲間も居て、恋する相手も居た。
あの日までは。

仲間に裏切られ、騙され、私はあいつの奴隷に身を落とした。
あいつは当てつけに、私の恋する相手であったギルドマスターに一時預けたりもした。

引き取られた後待っていたのはやはり屈辱の日々。
あいつの仲間に廻され、その後は、体を売ってあいつの金を稼がされた。
用意周到で、仲間が助けに来る前に、違う国に移った。

そんな中、子供が宿った。
嬉しさと、悲しみ、生まれてくる我が子に対する憐れみが浮かんだ。
この子には一部の望みは在るのだが・・・
「この子を守る力が私には無い・・・」
あいつは子供のことを知ると、私の体を労わってか仕事を減らしたが、
「お前の子なら高く売れそうだ」
そう言われて、あいつの顔を見た瞬間、感情が爆発・・・する前

に頭に激痛が走った。

「ひゃっはっは、その顔、たまんないねぇ」

なんとか、なんとかこの子が、この子だけでも助けたい。

そう思ったが、既にここは村から離れた屋敷で、村長と必要な会話をする以外の会話は禁止されていた。

それだけに留まらずに・・・。

子供が生まれた。

とても愛おしい愛くるしい我が子。

再びお金を稼がされ出し、家を長く空ける事が多かったが、この子は泣いた形跡すらなく私を待っていた。

なんて聡明な変な我が子、友人の子供は泣いてばかりだったが、必要以上に泣くことは無く、言葉も早くから話せるようにもなった。

教えていない言葉を話すのはなぜかしら?

でもこの子なら・・・。

何度か殴られ蹴られ、どうにかあいつと話を付けて、１０歳で貴族に売ることで決まった。

それまでは、この子と居られる。

禁止事項は色々と決められたが、計画を立てて実行しよう。

この子に全てを押しつけることになる計画・・・

この子の事だから、あいつの顔を見たがるだろう。

あいつの顔を見せて、その際あいつに殴られるように芝居を打った。

この子が蹴られたのと、期間が短くなったのは予想外だったが、この子なら私を導けるだろう。
本当に優しい子供だったので、罪悪感はあったが、それでも・・・。

この子は本当に不思議な子だ。
簡単に学習できるものとできないものが在り、それでもいろんな事が直ぐにできるようになったし、　理解もしていて、一つ覚えていろんな答えを導き出したりした。
魔法すら簡単に使って見せ（私に隠れて練習していたようだ）、迷宮「ガルムの森」でもガルムを簡単に倒せるようにもなった。
魔力量もすごい勢いで上がってきているし、私の表情にも気付けるようだし、おそらく他種族の力も持っている。

それにしても、外見が・・・。
確かに可愛かったから淑女にした方が面白・・・いいと思ったのだけれど、何で日毎に可愛くなってくるのかしら？
それでも一応男の子なんだよねぇ・・・時々手付きが怪しいし目も・・・。
本っ当に、どこで覚えたのかしら？
ノスティ家に売ったら（売らないけど）、家の娘を襲わないかがちょっと心配ね。
っと言うか、流石にやり方なんて分からないわよね？？？

閑話　私の願い・・・2

リミットが近づいてくる中、寝る前にあの子の表情や雰囲気がいつもと変わっていた。
ようやく・・・ようやく時が来たのだろう。
この子と別れるのと重荷を背負わせるのは辛いが、ここまで来たら引き返せない。
頑固な私のせいで、自身で悩むことになったのだが、やはり自分の決定は覆せない。
すると、我が子の言葉に耳を疑った。

は？転生？
そして話の最後に我が子に告白された。
・・・って、えーーーーーーーー？

「ふふふ、複雑ね・・・。息子が転生者で、私が好きで・・・」

ど、どうにか隠せたかな。
でも納得。

「確かに貴方から向けられる眼差しに男としてのそれを感じる時が何度かあったわね。体を拭いてもらっている時とか一緒に寝る時とかも、ね？」

恥ずかしがってる、か・・・可愛いー。
思わず頭を撫でた、真っ赤になった。
もっと、もっと貴方の事が知りたい。

「名前・・・、教えて貰える？」

「今は・・・できません。全て終わらせてから・・・でいいですか？」

残念、いや・・・これでいい、知れば知るほどこの子に惹かれてしまうだろうから。

頭から熱が冷め、少し冷静になった。

「そう。でも前世の記憶があるなら、生活に不自由させたかしら？」

「お母様が居てくれたので全く思いませんでした」

嬉しかった、でも意地悪して「本当に？」と返してみた。

「お、お風呂が無いのと料理が塩味のみなのは正直つらいですっ」

本っ当に正直で優しくて・・・私は・・・この子の隣には絶対にいてはならない・・・

「正直ね、本当に・・・、私の・・・子供には勿体ないくらい・・・」

反論できないよう何も考えることができなくなるほど、強く抱きしめた。

「私は貴方の母で、なのに商品として育てていて・・・、それでも貴方は・・・分かっていて私を好きでいてくれる・・・。でも私は・・・貴方の想いに応えることは・・・」

できない。

この子ならあいつを殺さずに奴隷解放を行えるだろうし、既に私の事も悟っているはずで、それでも好きだと言ってくれた。
でもだからこそ・・・。

夕方、あいつがもうすぐ来そうだ。
あの子はどんな作戦を立てたのだろうか？
在り得ないくらい単純だった・・・が、あいつも単純だった。
「私を差し向けたらどうするのよっ！」と叫びたかったが、急がなければ、迷宮から出たあの子が私を直ぐに見つけられる場所へ・・・。
早く会えなければ、最悪出会えずに死んでしまうかもしれない。

待った時間はそれほど長くなく、体が痛み出したが、それからは、とてつもなく長く感じた

「早くっ」

体が痛くなってきて焦った。
確か主人が死んでから奴隷が死ぬまでは長くないはず。
あの子が見えて、こちらに向かってくる。
酷い頭痛がする頭を抱えたまま膝を突いた。
「終わった・・・のね・・・」

「どこか痛いのですかっ？何かあったのですかっ？」

近づいたユウアを強く抱きしめた。

この子は変に疑問を持って悩むし、手紙も残せなかったから、出来る限り答えておいた方がいい。

うまく声が出せないし、出すのも辛い、でも、

「死ぬ時が・・・来たの」

「何で、何で母様が死なないとならないのですかっ？」

「言って・・・無いもの。奴隷の主人が・・・選べる選択肢・・・死んだ際苦痛を奴隷に与えて・・・殺せる」

「そんなの聞いてないですっ。何で言「貴方に言えば・・・叶わない・・・私の望み」」

そう、言っていない。

言えば叶わなくなる望みだったから・・・。

「っ！お母様は僕と一緒に居たくなかったのですか？」

「そんな訳ないっ」

即答した。

でも、貴方が私を思うほどに私は苦しくなって離れたくなるだろうから合っているのかも。

「ならっ「私は・・・貴方の未来に・・・居てはならないほど・・・」」

「それでも「うぐっ、」母様！？」

強い痛みが走った。

「聞いてっ・・・私自身が・・・もう耐えられなかった・・・貴方の成長は・・・楽しみだった・・・けれど・・・決めた・・・貴方が普通の子供・・・じゃないと分かって・・・奴隷は自分から・・・死ねない・・・だから・・・それにもし・・・失敗したら・・・これまで以上に・・・これが昨日・・・貴方の想いに答えられなかった・・・理由・・・本当に昨日は・・・迷ったのよ？」

「母様・・・」

この子に全てを押しつけることになるのは、辛かったが、それでも実行した。

後は・・・

抱きしめていたのを解いて、キスをした。

私の魔力の全て・・・あげる、うまくいくは分からなかったけれど・・・。

体から力が抜けていき、ユウアが体で受け止めてくれた。

そう言えば名前・・・聞いて無かったなぁ、でもいいかぁ。

「ありがとう・・・貴方が私の子供で・・・良かっ・・・」

本当に・・・

第１１話　溜息ものな話を聞いたのだが（前書き）

読んで頂いている方々に感謝です。
前に学校編に入ると書いたのですが、数話挟むことにしました。
今回は若干重めのお話ですが、お楽しみ下さい。

第１１話　溜息ものな話を聞いたのだが

ここはどこだ？
真っ暗な世界、そこで俺は周りを見回した。
あれば母様とあいつ？
瞬時に暗闇がリビングへと映り変わり、あいつが母様を殴り倒して上から伸し掛かった。

「やめろっ」

気付いたら駆け出していて、あいつの背中を短剣で刺していた。
刺したあいつをどけると、息絶えたあいつがいた。

「え？」

そしてさっき刺した人間を見ると・・・

「おかあ、さま？お母様！」

駆け寄ろうとしたが、後ろから誰かに抱きしめられた。

「私を殺して」

後ろからお母様の声。
喋ろうとしたら不意に足を捕まれる。

「うわっ」

上向きで血まみれの母様が手を伸ばして俺の足を掴んでいる。

さらに不意に後ろから強く押されて倒れ込んでしまい、母様の所に倒れ込んでしまう。

俺の顔は母様の腹辺りに落ち、尖根が腹を突き破って伸びてきて、首に絡まった。

目の前にぬーっと母様の顔が現れ、

「「私を殺して」」

多数の手で足や腕を捕まれて引っ張られる。

「「私を殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺し「助けて」て殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺「ありがとう」して殺して殺して殺して殺して・・・・・」」

酷く気分が悪い。

そう感じながら目が覚めた。

いつもの天井だった。

体が汗でびしょ濡れで気持ちが悪いし、今だに母様の『殺して』という声が響いている。

「そうだ、お母様は？」

魔力を探った所、母様の魔力は感じられなかったが、隣の部屋に村長ともう一人知らない人がいるのが分かった。

汗の水分を操って集めて蒸発させた後、隣の部屋を訪れた。

「あ、どうぞ」

ノックしたら知らない若めの女性の声が返ってきた。

中に入ると、相変わらず青色バーコードな村長と、見た目は１２か１３歳位で、紺色ショートミニポニー（ミニポニーは後で発見した）、肌は若干焼けた感じの美少女って訳では無いけど可愛い分類には入るような女の子がいた。

「えーと、おはようございます？」

「もう昼過ぎじゃがな。サリア、ご飯を用意してきておくれ」

サリアさんって言うのか。

「余りお腹は減っていないんですが・・・」

「そうは言っても、二日間も寝込んでいたしのう」

「えっ？」

「驚くのも無理はない。取り合えず水を飲みなさい。それから話そうかのう」

そう言って、アイテムボックスから木椀を取り出して魔法で水を注いで渡してくれた。

「ありがとう・・・ございます」

少し飲んでから村長が話し始めてくれた。

「2日前の朝、いつまでもあの男やお前の母を見なかったから、確認の為に様子を見に来たのじゃよ。そして裏庭でお主が倒れているのを見つけて、孫のサリアと共に看病しておったのじゃよ」

サリアさん、何でここで顔が若干赤くなのですか。

あれ？倒れてた？母様は？

「二人とも看病して頂いてありがとうございます、所で・・・母様・・・はどうなったのですか」

「・・・それがあやつ何処にもおらんのじゃよ」

何処にもいない？消えた？まさかあいつが生きてて連れて行った？いや、無い。生きてたら、俺も連れて行って売るか、惨殺でもしそうだ。

「・・・出来れば何があったのか教えて欲しいのだがのう」

人を一人半・・・じゃなくてほぼ殺ししている為少し迷ったが、危ない魔法を抜かして且つ大まかに話した。

「ふむ、話しが本当ならば奴隷であったお主の母は確実に死んでおる、だが・・・。お主が気絶している時に誰かが・・・というのも無いじゃろうし」

そういえば、寝込んでいたのは2日間らしいが、その前は？

「ところで、今日何日ですか」

「クーラの8日ですよ」

答えてくれたのはサリアさん。

「8日・・・、あの日は4日だったから、見つかるまで2日間ずっとあそこに倒れていた・・・ってことですか・・・」

「「・・・」」

少し長い沈黙を破ったのはサリアさん。

「はぁ。わかんないことを悩んでても仕方がないわね、軽いご飯持作ってくるね。少しは食べないと駄目だよ」

そう言って出ていった。

「それで、これからどうするのじゃ？」

少しして村長が切り出した。

どうしようというよりも、今は頭が動かなくて何も考えられない・・・

「ワシの本音としてはのぅ」

急に重々しい雰囲気になった。

「出来る限り早くこの村を・・・出ていくべき、というところじゃな」

重っ！重過ぎる、８歳にも満たない子供の追放って。

「あやつが奴隷であるお主の母を使ってこの村で行って来た非道の数々。勿論お主にもお主の母にも非がないことは分かっておる。そして今お主の存在を知る村人はワシとサリアだけなのは幸いじゃ。なのじゃが・・・」

「実質力を振るった人の子供・・・知ったらこれまでの怨みを少しでも晴らそうとするでしょうねぇ。一人が始めたら雪だるま式に。はぁー。で、知られる前に出て行けってことですね・・・」

「すまんのぅ、雪だるまが何かは知らんがワシにはその怨みは分からんでもない。あやつがサリアに手を出しておったら確実に怨んでいたじゃろうに。最も、サリアはとある貴族の妾となることが決まっていると言ったお陰で手を出されなかっただけで、貴族の下に行くのも嘆かわしいことなのじゃがなぁ、そもそもあの馬鹿息子が・・・何で可愛い孫が・・・サリアは本当に可愛いんじゃぞ・・・お主もサリアほどではないが・・・サリアは・・・お主は子供にしては冷静じゃのう。サリアの数年前は・・・この前なんか・・・ちっちゃい時から・・・」

何か語り出したー。

ってかあいつ少女にまで手を出そうとしてたのかよ。

心底辛そうで、でも、楽しそうに話しているのはわかるが、この人どう止めようか、何て返事しようか、家の事情に口出しすれのも良くないだろうし。

「そ、そういえば、村を出て行って欲しいというお話でしたね。出ていくのは構わないのですが、少しお時間を頂いても宜しいですか

？」

どうにか止めることができた。

でも・・・この母様との思い出が詰まった家はどうなるのだろうか、どうすればいいのだろうか。

そして出て行って何処に行けばいいのだろうか。

加えて部屋のドアの前にずっといるサリアさんをどうすればいいのだろうか。

「一季程ならどうにかできるじゃろう。考える事も名残も多いじゃろうし。そうなると食事はどうするかのう」

食事の話題だチャンスですよサリアさん。

サリアさんが食事を持って来てくれました。

何て空気が読める子なんだ、サリアさん。

「そうじゃサリア、一季ほどこの子の面倒を見るのじゃ」

爆弾落とした村長さん。

第１２話　同居生活が始まったのだが（前書き）

不定期更新と言いながら定期的に更新させて頂いています。
あと数話は定期更新（２日毎）できると思います。
それではお楽しみ下さい。

第１２話　同居生活が始まったのだが

サリアさんと同居させて頂いております、ユウアです。
困ったことに家の中でやることがありません。
いや、家事とか手伝いをしようとしたら激しく止められるのです、サリアさんに。
サリアさんは家事全般ササッとこなし、料理も旨い（俺の好みを既に把握してやがる）、聞き上手話し上手、子供の寝かしつけうまいうまい。
毎日余り無い胸に抱かれて眠っていますはい。
勿論最初は念のためにやんわり拒否したのだが、

「一人だと寂しいでしょ？悪夢を見るかもしれない、一人だと心配、一人トイレが怖いだろう、二人のほうが安心、べ、別にあたしが一人だと寂しいとか怖いってわけじゃないんだからね、仕方が無いから一緒に寝てあげるのよ、っというか一緒に寝なさい」

何て言われて。
一応男だってこと伝えたのだが、若干顔を赤くしながら「知ってるよ」と。

翌々考えてみれば、気絶している間お世話して貰っていたってことは体を拭いたり排・・・を処理して貰ったりしてたってことだから、つまりその・・・隈なく身体を診られている訳で・・・、恥ずかしい。

「サリアさん、改めて寝ている間お世話してくれてありがとう」
「う、うん、えへへ」
改めてお礼を言ったら、なにこの可愛い人！。
「でも可愛い妹が出来たみたいで世話をしてて嬉しいし楽しいよ」
いやだから男です、この場合弟ですって！
「どっちでもいいじゃん、でも可愛いから妹ですっ」
「・・・ハァ」
「そうだ、あたしの事お姉ちゃんって呼びなさい、お姉様でもいいわよ？」
姉貴ぶりたいのですか・・・サリアさん末っ子らしいですからねぇ。
まぁそれくらいなら構わないですよ。
母様を失った痛みがさほど苦しくなかったのはサリアさんのお陰げだろうし、悪夢もあれから見てないし。
「お・・・お姉ちゃん」
そろそろ精神年齢３０歳の俺が少女に対して言うのは小っ恥ずかしい。
「うんうん！」

どうやらお気に召したようだ。

「次はお姉様、はいっ」

「お姉様？」

「はうっ、も、もう一回」

「お姉様」

「もう一回！」

何故かハァハァ言ってやがる・・・。

1時間ほど『お姉様』と呼び続けさせられた。

そこに村長が現れた。

「ワシの事は御祖父様と呼ぶのじゃよ」

「うんっ。・・・じじい」

ごめんなさい。

しょぼくれていた村長さん（これからはおじーちゃんと呼ぶことになった）は何だか可愛いかった。

そういえば、ポケットの中に母様のギルドカードが入っていた。

少ない預金が見えたということは俺が受け継いだとかか？

アイテムボックスって念じたら使えた。

目の前に顔くらいの大きさの丸い空間が開いて、覗いた瞬時に中

身全部を把握できた。
中にはサバイバルキットと服一式×3と短剣が一本。
他は売ってお金に替えさせられたんだろうなぁ。
昔見たことのある母様が装備していた短剣、念じたら取り出せた。
何だか母様の魔力が感じられる。

「お母様・・・」

短剣を握りしめてしんみりした。
母様の魔力が感じられるって事は、他の母様が使っていた装備からも感じられるかもしれない。
集めに行こう、どれだけ時間やお金が掛かっても・・・。

・・・言っておくけど、服を出してはぁはぁなんてしてませんよ？
サリアさんに他の女の人の・・・なんて言われてませんよ？
子供は親の匂いで安心するものなのですよ。
サリアさんに母様の遺品を見つけてずっと抱いてたって言ったら、今日は一段とべったり付きっ切りになった。

それと、家の中を隈なく探索したが、手紙とか母様に関する物とかは何も無かった。
少し寂しいが、無いのだから仕方が無い。

今日は母様との思い出のベッドに浸って考え事。
サリアさんは今出掛けている。
あの時のキスは受け継ぎとかの魔法だったのかも、というかそれしか考えられない。
その魔法のせいで母様の身体に何かあったのだろうか・・・。

もしかして魔力とかも引き継いでるのかなと思ったが前と同じ量。
そういえば母様に封印して貰ってたんだっけ？

「取り合えず・・・、封印解除っ」

適当に言ってみたのだが、何だかすごい勢いで魔力が溢れ出てきた。
しかも木造部屋がギシギシと軋み出した。

「やばっ、封印」

収まったー。
母様の魔力の数倍・・・いや全部感じる前に封印したからそれ以上・・・。
サリアさん出掛けてて良かった。
サリアさんが常人に当て嵌まるかはわからないが、あんな魔力に当てられたら多分危ない。
うんっ、封印封印！
少し前は母様を越えた位だったのに・・・正直チート極まって危険領域。
今後使わなくて済めばいいが・・・何て考えたらフラグだよなぁ。
でもこれだけ魔力があるのなら・・・勇者召喚できるかも・・・。

しませんよ、恐らく。

第１３話　事実にがっかりしたのだが（前書き）

さくっと掛けたので、連日更新です。

第１３話　事実にがっかりしたのだが

サリアさんとの生活が始まってから数日後に迷宮に出掛けてみた。
結構過保護的に行かないよう諭されたが、お金と素材が無いと旅がしんどいですからって強引に押し切った。

ガルムの森は正直飽きたのと出口から出たことあるのでワープで略。
便利です。
小さな泉の先にあるのは次の迷宮のトレントの森。
とあるファンタジアなエルフ里の奥の森のような感じ。
ウッドマン（１ｍくらいの根っこが絡まった人型魔物）うざー。
関係ないが、とある超マイナーなゲームのルートマンってやつを思い出した。
あいつら最弱なのに大量だし森の加護で異常に固くて固くて。
まぁ目の前のこいつらは大量に湧きやがるけど魔法に弱いので火属性の下位魔法を速連射。
木材や紙の束が幾つか手に入ったのでアイテムボックスに仕舞ったのだが・・・

無くなった、だとぉ！？

入れた途端に消えて無くなりましたー。
仕方がないので再度ウッドマンズを殲滅。
幾つか手に入った木材を入れてみたら、最後に入れたのが残った。
訳がわからん。
因みにギルドカード持ってたら、お金が自動的に預金に入りました。

便利です。
進んで行ったらくまさんズ発見、２m位×５匹で全員こっちに向かって来たー。
「イラプション」
地面を３００度位にする魔法。
おおー、くまさんズが転げ回っている。
クマの踊り焼き・・・。
可哀相だからサッサと倒すか。
温度を上げて倒しました。
アイテムを幾つかドロップしました。
熱い地面に落ちて肉以外溶けてしまいました・・・。
こんがり肉ご馳走様でした。

ウッドマン、リザード、ガルム、トレント（動く木。林檎爆弾を飛ばしてくる）、くまさんを倒して素材を集めながらある程度進むと、森の奥の開けた場所に出た。
少し進んだら、大地を震わす程の激しい咆哮を聞いた。
「っく、やばい感じがする」
耳を塞いでいると、５０m程先に出てきたのはでっかい銀色くまさん。
後ろを見たら、道が根っこで完全に塞がれている。
逃げられないボス戦ってか！
銀色くまさんの方を向くと、土煙を上げて凄い速度でこっちに向かってきた。

恐い、恐すぎる。

「っ！エクスプロード！」

銀色くまさんの直進速度に合わせて座標を定め、そこから直径１０ｍほどの爆発を起こした。

「耐火属性かよっ！」

銀色くまさんはトレントとかを一発で仕留めた爆発に若干怯んだ以外何事も無く向かってくる。

「ならばイラプション！」

地面が溶ける程の温度でどうだっ！

通れまいっ！

目の前に灼熱の赤い溶岩が半径２０ｍほど扇状に拡がったが・・・

そ、速度を速めてジャンプして来たー！！！

俺は風の補助＋垂直ジャンプで６ｍほど跳んで何とか避けた。

銀色くまさんは跳びながら体をひねってメガトンパンチを俺がさっきいた場所に繰り出し、地面には直径５ｍ程のクレーター・・・。

少し衝撃波を喰らったが、どうにか避けることに成功、銀色くまさんもクレーターの中へ。

でっかい銀色くまさんとの距離は５ｍ程だが、跳んだだけでクレーター内に落ちていくだろう俺。

「ブラストウインドっ」

自分に突風を当ててクレーターの外へ、銀色くまさんのベアーク

ローが目の前の空間を切り裂いたのが見えた。
目の前にあった死の恐怖と魔法ダメージで、体がガチガチしているが、縦４ｍ横２ｍ弱の魔法が効かないっぽい銀色くまさんがすぐそこにいる。
使いたくなかったが、考えてた卑怯技・・・使うか。

「オリーブオイル！」

クレーターの中に撒きました・・・蟻地獄ではなく油地獄・・・
いい匂い・・・。
駆け昇ろうとしていた銀色くまさんは見事にすっ転びました・・・。
起きようとして何度も転んで、跳ぼうとして力を入れて転んで、少し可愛い。
寝転んだまま咆哮しても、少ししか怖くないです。
後は上から・・・

「瞬間接着剤！」

消防車の放水並の大量の透明な粘性液体をドパァっとぶっかけた。
もがいてるもがいてるもがいてるもがいて・・・固まった。
動けない相手に睨まれても・・・ちょっと怖い。
このまま弱るのを待つか、魔法で倒すかどうしよう。
銀色くまさん死ぬ気配ない。
ふと周りを見渡せば油。
その油を集めてみました。

「ふむ」

銀色ベアーさん溺死ならぬ油死・・・。

「ちょっとチートで鬼畜で外道だったかな？でも俺の普通の魔法が効かないなんて、銀色くまさんも結構チートだろ」

それにしても、油とか接着剤って近接戦闘型に対して卑怯だね、やばくなったら何時でも使うけど。

銀色くまさんが消えてアイテムをドロップした。

「くっついたー、まぁ魔法でちょいちょいっと」

接着剤を溶かすのなんて楽勝。
手に入れたのは、小さな宝箱。
中には・・・

「クリスタル！銀色毛玉入り・・・」

毛玉が入っているのには、テンション下がった。
うーん、この手のアイテムはゲームとかの場合、銀色くまさんを召喚使役ってのがテンプレか？。

「召喚！・・・クマさん出ておいで～・・・召喚銀色くまさん！・・・シルバーベアー・・・ネバネバになりたくなかったら出てこーい」

・・・。
反応無し・・・空しい。
まぁいいや。
俺には必要無いだろうし。
アイテムボックス開いて・・・

無い！
木材が！
トレントの落とした美味しい林檎が！
くまさんの落とした美味しいお肉も！
その他も！

ここに来るまでに結構貯まったのに。
変化の無い物も幾つかある！？
何か理由が有るはずだ、考えるんだ・・・。
最後に入れたのは銀色くまさんに会う前でその時にはあったはず。
ということは！
銀色くまさんに使った魔法は順に火属性魔法で攻撃と足止め、風属性魔法でアシストと回避、オリーブオイル、接着剤、接着剤溶かす溶剤。
異質なのは明らかに後者三つ？
取り敢えずウッドマンやトレントを狩って木材をと考えたけど、ここは森じゃんってことで、

「ウインドカッター」

かなりの魔力を込めた風の刃を地面１０ｃｍ位上で水平に前に飛ばした。
木々は切り倒れて地面に落ちた途端に消えて無くなり、切り株の道ができただけだった。

・・・銀色くまさんのいた場所は魔物が出てこないようだから、ゆっくり落ち着いて考えてみよう。
えーとオリーブオイルは油で基本元素はＣＨＯで若干その他含む、木とか肉も大体同じ。
ははは、まさか・・・試してみよう。

そうだなぁ、ガルムの落とした岩塩君、君に決めた！
アイテムボックスから岩塩以外全部出してっと、臭いで分かるやつ・・・

「塩素ガス」

うんっ、危なかった。
あー岩塩かなり減ってる。
今度は岩塩も出して、再度塩素ガス。
そしてアイテムボックスに岩塩を入れると・・・消えてった。

素材を分解して作り出している＋無かったら前借りになるようだ。
塩素を消費して残るはずのナトリウムが残ってないって事は、残った物は破棄される！？

そーなのかー。

チートの裏には地道な素材集めってか・・・。
はぁぁぁ・・・
急に疲れたー怠いー帰るのも怠いー前借り嫌だーでも素材集め怠いー。

・・・帰るか。
マッピングで道はわかってるのだが、遠い。

「ま、地道にアイテム集めて地道に帰りますかねぇ・・・・・・メテオスウォーム」

第１３話　事実にがっかりしたのだが（後書き）

夜遅くなってしまって帰ったらサリアさんにすっごく怒られました・・・。

第１４話　変な奴が現れたのだが

突然だった。
いきなり玄関が開いて男が入ってきた。
「サリア～居る・・・か・・・・！？」
突然の事に驚いて唖然として男を見つめてしまう俺。
通常なら人が家に近付けば魔力で感知出来るのだが、この男からは魔力が感じられない、いや、意識すれば辛うじて分かるくらいか。
男は１６歳位だと思うが、何だその羨まし過ぎる身長は。
俺今１２０ｃｍ位、サリアさん１３５ｃｍ位、男は恐らく１８０ｃｍ位畜生！
しかもグレー髪細マッチョで顔も・・・ゲジマユ以外悪くないとは思う。
そんな男も俺に視線を向けて固まっている。
「ザ、ザイ兄さんいきなり入って・・・」
サリアさんの兄さんか。
サリアさんが話しかけているのを無視してお兄さんが俺に近付いて来た。
流石に銀色くまさんと比べると迫力は劣るが、その眼差しに危険を感じて退くかどうか迷っていたその時、
「俺と結婚してくれ」
場が凍った。

「ふぉっふぉっふぉ、ユウアちゃんが本当の孫になるのかのう」

「黙れじじい」

あれ？この人俺が男だって知らない？サリアさん言ってない？それともじじいのおふざけか？

「僕はお「ザイ兄さん、いきなりそれはないです。手順と順番を守って下さい。言っておきますがあたしが先ですからね！」・・・」

「いや、いくらサリアでもそれは譲れん。俺達は運命で繋がっているんだ」

「・・・その運命、千切りますよ？」

「お、脅されても屈しない・・・屈しないぞー」

「それにあたしの妹であり娘でもあるユウアには指一本触れさせません」

「ならば夜にでも忍び込んで・・・」

「残念でした。あたしが毎日一緒に寝てるので不可能です」

「な、う・・・うらやましいっ」

「へへーん、ユウアちゃんの抱き心地、眠ってる顔、吐息。全てザイ兄さんには一生手に入りませんよ」

「くっ、けしからん。けしからんぞー。ならば妄想で補うまでだ」

「可哀相なひと。精々卑しく妄想してなさい。ユウアちゃんのすべすべお肌、ユウアちゃんのぷにぷに頬、ユウアちゃんの柔らか太股、ユウアちゃんの・・・」

「ぐあぁぁぁやめろぉーーー」

「ザイ兄さんがユウアちゃんを諦めるまで何度だって言います、っていうかユウアちゃんで妄想するな！」

「畜生っ、そして酷っ。そ、そうだユウアちゃんに聞いてみよう、そうしよう」

「あっ、何あたしに断り無くユウアちゃんに話し掛けているんですか、汚らわしい。ユウアちゃん、はっきり拒絶してあげなさい」

「ちょっ、おまっ、拒絶一択かよっ」

「ユウアちゃん、ほらっ！・・・ユウアちゃん？」

「・・・・・・えっ？何？」

ごめんなさい、二人の会話に危険信号出てたので、これまでに集めた大量のアイテムを眺めてました。

ふと周りを見渡すと、目の前にすごい形相の一人、でっかい胴体、そしておじーちゃん村長は部屋の隅で体育座りしてブツブツ言ってる。

何この状況。

「だーかーらー、うザイ兄さんに『近付くな変態』って言ってあげなさい」

「な、違うっ、俺は変態ではない・・・多分。そして『う』を付けるな。ユウアちゃん、今話していたことは俺とユウアちゃんがけっこゴフッ」

強烈な金蹴りだった。
いやぁ、こんな強烈なサリアさん初めで見た。
・・・目で追えなかった。
サリアさんの人物像が崩れていく・・・いや、こっちが素か。
ちょっと怖い。

「ええっとー、仲いいですね」

「「どこがっ！！！」」

いいハモり頂きました。
さて、場を納めるには何て言えばいいだろうか。
何の話だっけ、拒否ればいいのかな？
俺としてはサリアさんの味方で確定、怖いし。

「取り敢えず、自分より弱い男には興味ありません」

これくらい？
酷く拒絶したりするとストーカーとか強攻策に出る可能性があるから、若干希望を持たせてと。

１２０ｃｍの子供に弱いって言われ、首を傾げるお兄さん。

「そうですよ、ユウアちゃんはあたしよりも強いんですからね、図体だけのザイ兄さんがゴミのように沢山纏まっても不可能です」

サリアさん言うねぇ、ゴミって・・・。

「それに、ユウアちゃんはこれから学校行くのでもっと差が付きますけどね」

「どこの学校だっ！」

「王都ですよ」

「爺っ、俺は今から王都の学校に行く。父上と兄上に伝えておいてくれっ」

そう言って家を飛び出した。

あの歳で学校に行って無かったのかよ。

俺は王都ではなく一番近い学校に行く事に決めたのを二人には既に伝えてある。

学校に行くのは年齢的に、そしてこの世界の事をもっと知っておきたいから。

でも王都なんかに行ったら、貴族とかのゴタゴタに巻き込まれそうだから絶対に嫌。

・・・サリアさんは恐らくお兄さんの性格分かってて、誘導したってところか。

「流石お姉様」

「うんっ、だってあたしのユウアちゃんに虫が着いたらたら追っ払うのは当然。ああ言ったら兄さん飛び出すの分かってたしね」

何時の間にサリアさんのモノになったー！？

俺も反論するだけ無駄だってこと学んでいるので反論しませんできません。

それにあのお兄さんの小さな魔力を覚えたから逃げるのは容易いので、もう会うことは無いだろう。

でもサリアさんとは別れてからいずれまた会いたいなぁ。

「ユウアちゃん、出ていく支度をするのじゃ」

・・・はい？

復活したおじーちゃん村長にいきなり言われた。

「ちょっと祖父様いきなりどういうこと！？」

「いや、そろそろ村人達を嘘八百で抑えるのが苦しくなってきてのう。それにあのバカ孫が今日来たのは恐らくバカ息子の仕業じゃ。そしてバカ孫はバカ息子に何かしら報告はして行くじゃろう。あれで意外と律儀でな。そしてあのバカ息子はお主の母をかなり嫌っておったからすぐに何か起こすかもしれん。・・・済まんのぅ」

一体何を村人に言ったのか問い詰めたいが、嘘を言ってまで俺の為に今まで押さえてくれてたのだ、ここは感謝すべきだろう・・・じじい言ってごめんなさい。

「何時でも出られるようにはしてありました。直ぐにでも出られます。今まで本当にありがとうございました・・・」

涙腺が緩む。
今はクーラ52で予定よりかなり早いが、準備はほぼ出来ている。
銀色くまさん倒してから毎日数時間、何時の間にか破壊箇所が修復されている迷宮で何度もアイテム集めして毎日大漁だった。
お金もかなり貯まったし、荷物は全部アイテムボックスの中だし、この家はおじーちゃんが管理して、村からは少し遠いが冒険者に使ってもらう事になったし、最寄りの学校までの迷宮も教えてもらったし、後は・・・。

「ユウアちゃん・・・」

サリアさんが抱きしめてくれた。
な、涙が止まらないー！
サリアさんのこの温もりを明日から感じられなくなるのはすごく辛い、一番辛い。

「大丈夫ですよ、お姉様。寂しいですがきっとまた会えますよ」

「うぅ、そこはずっと一緒に居たいって言って欲しかったな・・・。無理したらダメよ？知らない人に付いて行ったらダメよ？寂しいからって他の女性と一緒に寝たらダメよ？後は、後は・・・」

「あはは、そうだ」

俺はアイテムボックスの中からペンダントを取り出した。
トレントの森で手に入った糸に魔力を込めながら丹精込めて編み込んだ紐に、同じくトレントの森で手に入った銀色毛玉入りクリスタルをどうにか加工して取り付けた物。
お別れの時に渡そうと思って作っておいてよかった。
お守りになる、かもしれないから。

「ううーあたしまだ何も用意してなかったよ」

「お姉様には十分大切な物を頂きましたよ、とっても大切な思い出・・・今までありがとう」

「・・・うん、こちらこそありがとう」

先程の兄弟のやり取りと今のしおらしさのギャップがすごくいい、いいなー兄弟。

「ユウア・・・」

サリアさんは俺にそっと口づけをした・・・ってええー!?

「お、お姉様?」

「・・・今はお姉様でもいいかな?すぐに出るの?」

「?もう少しくらいなら大丈夫ですよね?」

「はっ、早く行きなさい。そうしないと・・・あたし・・・別れたく・・・というか・・・と、とにかく行きなさい。そして少しは男っぽく成長・・・したらダメっ、絶対!」

それはどうかと。

「元気でね?・・・行ってらっしゃい」

「うんっ、行ってきます」

「も、もしかしてユウアちゃんは男じゃったりするのかい？」

タイミング悪っ！

「そうですよ、おじーちゃんにもお世話になりました。ありがとうございました。これよかったら食べて下さい」

出したのはでっかいお肉のブロック沢山、野菜果物てんこ盛り。
口をぱくぱくしているおじーちゃん村長と苦笑しているサリアさんを置いて俺はさっさと旅立った。

あ、ベッド持ってくるの忘れてた。
家に戻った。

第１４話　変な奴が現れたのだが（後書き）

読んでくれている方々に感謝です。
そして次回から第２章に移ります。
ただ、更新は不定期になると思います。
これからも宜しくお願いします。

第１５話　いきなり学校なのだが

突然ですが、現在選択を迫られいます。

↓グレイブ：大量の鋭い土槍で串刺し
↓アクアエッジ：円盤型の高速回転水刃で切り刻む
↓イラプション：地面を熱くして焼く、溶かす
↓ゴッドブレス：風の塊で潰す
↓スパークウェーブ：雷の波で感電させる
↓ブリザード：吹雪で凍結させる
↓ウッドバインド：大量の木の根っこで捕獲圧縮
↓その他

さて、ここで迷うまでにあったことを説明しよう。

家を出た。
二つほど迷宮をさっと抜けて村に到着。
迷宮は破壊してないよ？
そこの子供と遊んで懐かれた。
親が泊まっていかないかってことで、泊まらせてもらった。

三つほどまた迷宮を、今度はじっくり探索して抜けた。
魔物の強さは分からないものの、居場所は大凡分かるので遠距離から魔法で遠慮なく。
老人ばかりの村に着いた。

美味しくない栽培野菜を食べて生活している人達。
手伝いとか食べ物を渡した替わりに何日か泊めてくれた。
孫にならないか、とか村に住んどくれ等のお誘いを勿論丁重に断った。

何度か迷宮と村を抜け、時には拠点を作ってアイテム集めしたりしてたら冬のランタになった。
そして次の迷宮群を抜けたら初めての町だってときに道に迷った。
後で知ったのだが、そこの迷宮群の一つに、入口のすぐ横に出口がある迷宮があるらしく、そこを見落としたのだろう。
時間があるから、未知の迷宮を進むのが醍醐味だからって碌に情報を集めなかったのが原因。
迷宮と迷宮の合間で村や町が無い場所を探休地と言い、そこから町が見えているから大丈夫だし、間違ってたら戻ればいいやってことで、下り階段や上り階段を進んで奥へ奥へとへと突き進んで行ってしまい、ある迷宮の出口を出た。

町に着かなくてがっかり。
この探休地は何故か明るいT字型の洞窟で、縦棒の中程に小さな川があった。
複数の出口がある時もあるから、見落としを探すために一旦戻って再開するかな。
でも、結構いい時間だからここでキャンプするか迷う。
ふと川に近づくと、若干暖かさを感じた。
手で触れて、暖かい。
これは・・・足湯を楽しまねば、ってな訳で足湯を堪能してたら、

「こんな所にガキがいるぜ」

「奴隷にしちゃいましょうボス」

「いや、後ろ姿に勃っちまった。犯る」

「出た、ボスのロリコぐえっ」

「おそらく成人だ、どっちでもいいがな、がはははは」

「でも俺達よりも強がはっ」

「服装を見ろ！休憩地で装備を脱いでるバカがいるか！きっと初心者だ」

「でもすごい魔法使いだったあべしっ」

「人数差を考えてみろ。こっちは十人あっちは一匹の小娘。お前らの少ない犠牲で俺は楽しめるって訳だ。がはははは」

「奴隷を連れて来れば良かべふっ」

「貴様を特攻一号にする！がはははは」

「うぅ、何で・・・」

なんてやり取りが後ろから普通に聞こえてきて、長いから足湯しつつ冒頭の選択肢を考えていた。

確かに今は足湯の為に装備（普通くまさん撃破時に手に入れたような気がする）を・・・外していない。

元から遠距離魔法のみで十分だったので、装備が必要なく普通の服のままだった

そもそも忘れてた。

まぁ油断してくれていそうだからよかったか？
この場所が血とかで汚くなる臭くなるのは嫌なので、ブリザードかウッドバインドにしようかどうしよう。

「にしてもあっしらに気がつかないなんて、初心者もいいところでやんす。将来が心配でやんす」

「毎回そう言いつつお前も俺のお下がりのガキ食ってんじゃねえか、がははははは」

「ガキって言ってぶほっ」

「まぁこうして曲がり角からこっそりと眺めている訳ですから初心者には気付き難いと思うっすよ」

「がははははは。生娘を洞窟内で・・・がははははは。よし、行け野郎共！」

正直こっちは待ちくたびれてました。
余りに調子に乗っている様なので、すぐに魔法を使わずに上げて落とす方法に変えてあげよう。

「な、何ですか貴方達は」

「げへへへ、お嬢ちゃん。怪我したくなかったらその短剣を捨てな」

テンプレ会話だ。
一番デカイのがボスかな？他の人より頭二つ程飛び抜けている。
俺は今は子供だけど、大きくなりたいなぁ、元の世界では小さかったから憧れてしまう。

いかんいかん、演技中？だ。
俺は後ろに振り返って、迷宮内に逃げ込もうとするが、
「岩石よ、行く手を阻め！」
突如道が岩で塞がれた。
へぇ、短い呪文でも発動するんだ。
魔法名だけで済んでたから試してないや。
予想通り逃走を妨害する魔法が使われた。
妨害魔法が無かったら一方から攻める訳無いよね。
怯えながらならず者共の方を向く。
そうだ呪文で魔法を使ってみよう。
「ほっ、炎よ、奴らを穿て」
適当です。
直径３０ｃｍ程の炎弾を5発打てたが、二つは途中で消えて三つは相手の魔法の岩壁に防がれた。
あれっ？消えた？うまくいかない？
「がはははは。こいつ冒険者としても魔法使いつっとしても半人前だぜ。魔法は気にするな。全員で掛かれ！」
焦っていると見てボスは部下に命令した。
まあいいか。
さてそれでは殲滅しようではないか！
・・・って時に現れるテンプレお人よし。

「そ、そこまでよっ！」

現れたのは声からして少女だが、人の壁でよく見えない。
賊共は全員少女の方を向いた。
いや、全員って馬鹿なのか？

「ボ、ボス、どうしやす？」

「がはははは、今夜は三人プレイだがはははは」

「あっしも交ぜてほしいぎゃっ」

「奴隷とでも遊んでいやがれ、俺様は一人一日中で計二日間、ぐへへへへへ」

「ボス、ワシも抱いとくげひょっ、・・・この恥ずかしがり屋さんっ！」

「この前抱いただろ」

・・・マジで？
あ、会話を尻目に少女が壁を走ってこっちに来た。
すげー今度やってみよ・・・猫耳！？
少女は束ねた真っ白髪が背中まであり、揉上げ長！
モミ子って呼ばれる揉上げキャラ漫画でいたような。
サリアさんよりも少し長身で年上かな？雰囲気が大人びている。
胸の辺りに何かのエンブレムがある黒い外套を羽織っていてその下は分からない。

「もう大丈夫よ」

そう言って俺は後ろから抱きしめられた。
って、何で抱きしめる！？
・・・これから育つだろう。
そして、貴女すごく震えていますよ。
勇気を振り絞っって助けに入ったのだろう。
その勇気は認めるが、唯の無謀にしか見えないです。
まぁ役得？だからありがとうございます。

「ボス、会話は後にしまふぐっ」

「おっと悪い。癖で殴っちまった。とっととっとっ捕まえろ！」

賊共が再度こっちに向かってきた。
少女は俺の近くにいるから広域魔法の被害に遭うことはないだろう。

ようやく殲滅「リスクール」・・・

少女は俺を抱いたままそう唱えると、足元に円形魔法陣が現れ、外円から光の壁が現れた。

「へ？・・・何これ？」

「緊急用の帰還魔法だよ。学校までひとっ飛びよ」

はあ！？
あーだから助けに入ったのか。
まさか王都の学校だったりして・・・フラグじゃね！？

ってそれよりも、まずい。
こいつら潰せない。
俺が『ブリザード』と唱えた直後、景色がすっと変化した。

第１６話　勝手な人ばかりなのだが

何処だここは？
広くて白い部屋には魔法陣の描かれた円盤型の台が幾つもあって、俺達はそこに乗っていた。
台は恐らく転移魔法用の設定到着地点ってところか。

「えーと、ここは？」

「ノーストノーザ校の中よ？もう、あんな所で一人で居たら駄目じゃない？」

よ、よかったぁ。
予定してた最寄の、大陸最北端の町の学校だ。
そして駄目と言われてもねぇ・・・学校に着けたのだから感謝はしておきますか。

「助けて頂いてありがとうございます。ユウア・ノインハーミルと言います」

「え？あ、うん。私はリタよ。」

「リタさんは怖く無かったのですか」

「わ、私？私は・・・」

いきなり部屋のドアが激しく開かれ、話を遮った。

「こんの馬鹿がぁ！何回目だ。安易に転移魔法使ってんじゃねぇ！」
登場したのはスキンヘッドで目に縦傷のついた厳つい顎髭オッサン（ハゲ男・・・やめておこう。スキン男とでも呼ぼうか）。
マッチョ筋肉質だか、意外と小さい１６０ｃｍ後半位。
そしてあぁ痛そうな拳骨。
「しかもガキなんか連れてきやがって」
「うぅぅぅぅ、だってだって悪い人達に囲まれてたんだよ？逃げ道塞がれてたんだよ？震えてたんだよ？」
「ああ　？だからって第一迷宮に唯のガキがいるわけねーだろ。小さい種族の血が濃い冒険者の可能性もあるだろうが（二発目）」
「あうっ、うぅ～。そ、そうだ。ユウアちゃん何歳？」
「えっ？今７歳で次の・・・」
「ほらっ、子供を保護したんですっ！」
何でどや顔なんですか。
そしてスキン男こっち睨まないで、その顔怖いです。
「何でてめぇガキ一人で迷宮なんかに居た？」
いやー言葉に怒気が含まれていて、恐ろしいです。
「学校を目指してて」

「いや、迷宮だよ？一人で？危なく・・・」

リタさんの言葉の途中に殺気を感じ、思わず飛び退いた。
少女もスキン男と距離を距離をとっていた。

「ははは、ガキにしちゃぁいい反応だ。迷宮を進んで来たってのは本当だろう。リタっ！こいつはお前よりもできそうだぜ。今回の転移魔法使用料金は俺が払ってやる。いい人材連れて来た駄賃だ」

「えっ、本当？教官ありがとえ？私より？本当にぃ？」

じと目で睨まないで、結構可愛いです。
にしても、びびった。
いきなり殺気なんて放つなっての。
で、話は終わったのかな。

「えーと、それで僕はどうすればいいのですか？」

「そうだな、まずは俺と手合わ「嫌です」ここでは駄目だな、ついて来い」

いや、入学まで後一季程なんですがどうすればいいですかって話です。
はぁー。
なんでこうも人の話を聞かない人ばっかりなんだ。
はぁー。

「あはは、あの教官戦闘狂だもん、仕方ないよ・・・これからまた扱かれると思うと・・・」

戦闘狂で鬼教官、そして人の話をスルーする。

ついて行くと、すぐ近くの部屋に入った。
中には大きめな台が一つあって、招かれて乗った。

「空いてるのは8か、闘技場8」

何だそのモンファンの集合場みたいな感じは。
スキンさんがそう言うと、壁に囲まれた闘技場みたいな所に出た。
広さはサッカーグラウンドくらいか。

「それではまず装備を着けろ」

「・・・」

使ったこと無い。

「ん？どうした？早く装着・・・ああ、習ってなきゃできんか。なら普通に着替えろ」

へ？装着と普通着替えってどう違うんだ？

「き、教官って変態、ロリコン！？女の子に目の前で着替えろ、なんて。最低ですっ！」

村に着く度女の子って言われて、毎回弁解するのは面倒臭くなっ

たのでこれからはずっとスルーしていく予定だ。
決して得だからではない。

「・・・てめぇ明日からどんな訓練をさせようか、っと済まんな。外で待つから着替えたら呼べ」

「いや、装備って使ったこと無いです」

「はあ？」

「まあ始めましょう、スパークウェーブ」

「ちょっと待ぐわっ「きゃっ」」

ちょっとむしゃくしゃしてきたから、二人とも巻き込みました。
一方は痺れて動けない程度、もう片方は電気治療程度にしてあります。
ぶっちゃけ非殺傷程度なら魔法名無くても使えるが、魔法名無いと楽しくないって事で使っている。

「てめぇ、いい度「スパークウェーブ」がはっ、て、てめ「スパークウェーブ」がはっ、糞「スパークウェーブ」がはっ、ちょっ「スパークウェーブ」がはっ、やめ「スパークウェーブスパークウェーブスパークウェーブスパーク」・・・」

「・・・」

「い、意外と癖になるかも、そして鬼だね・・・」

リタさんは頬を赤らめながら起き上がり、スキン男を見てそう言

った。
だって嫌だって言ったのに聞かない人が悪いです。
リタさんは仰向けに倒れてぴくついているスキン男に近づき、しゃがんで指で頬をつんつんしだした。
止めたほうがいい気が・・・

「む、朝か。マリア、おはよう」

さっきまでとは違い、無愛想だけど優しーい声でそう言って起きた。
そしてつんつんしている人と目が合う。

「・・・」

「・・・」

「くくっ」

「・・・」

「あ・・・あはははははっ、ひー、おかしー。む、朝か。マリア、おはよう。あはははは」

俺の笑いに追従して、リタさん大笑いしだした。
思考停止中のスキン男。
今後の為に止めておいた方がいいのだが、笑いが止まらない。

「ふっ、貴様ら覚悟「スパー」（ピクッ）」

もう一笑い。

言葉だけで魔法は使っていない。

「ったく、厄介なガキだ。それとリタ！おま「スパー（ｂｙリタさん）」（ピクッ）・・・明日から覚悟しておけ」

笑ってる表情のままリタさん固まった。

「ところでだ。お前が強いのは分かった。だが冒険者でも無いのにどうやって迷宮内を過ごしていた？」

急に真面目な雰囲気になった？

「どうやってって普通に？」

「言い方を変えるか。ガキ一人で荷物も持ってない。・・・どうやってだ」

余り変わって無い気がする、言いたい事は分かるけど。

「それは・・・」

うーん、どうしようか。

母様のを引き継いだってのを言うべきかどうか迷う。

「まあ、大方親から引き継いだってところだろう。たまにいるからな」

いや、分かってるんなら質問するなっての。

「お母様からです」

「そうか・・・」

何だかしんみり。

「全く、ガキのくせして落ち着いてるし、魔法も呪文無し、これで近接も・・・」

話の途中で一瞬で俺に近づき、頭に向けて蹴りかかってきた。
蹴りはどうにか見えたので咄嗟にしゃがんだ。
だからぁ、不意打ちとかやめてくれ・・・。

「つ、次やったら魔法でいじ・・・反撃しますよ」

「ったくよぉ。必死に頑張って強くなったってのにガキに簡単に避けられるし笑われるし・・・。で、何だ、お前は学校に何の用だ？何しに来た？」

やさぐれました。
何の用って言われても、連れて来られただけです。

「あ、あのー、もしかしてあの時私の助け要らなかった・・・かな？」

「まぁ、正直。でも道に迷ってたし、丁度学校にも着けたので、結果的によかったです。ありがとうございます」

「そっか、やっぱり？そう。ごめんね。でも入学まで日があるから、連れて来た私が面倒を見るね？それくらいはしないと」

「リタっ！・・・本当にいい、のか？」

その含みは何かあるのか？あるんだろうねえ絶対。

「お金はあるので宿でも「駄目！」・・・」

「教官、私の部屋ベッド一つ空いてますから泊めてもいいですか？」

「妹はいいのか？」

「入学後の予定ですから。ついて来て」

「おいちょっと待て。ここで待ってろ。来賓用のカードを持って来る。学内を移動できんだろ」

「部屋に持って来て下さい。さっ、行きましょ？」

「ったく」

「・・・」

勝手に話が進んでおります。

俺の意志は一体何処へ・・・。

第１７話　変態なのだが

暖かい。
あれだあれ。
そう。
サリアさんに抱かれて寝てた時みたいに。
・・・みたいに！？
目を開けると前にリタさんの顔が、近っ。
吐息が掛かってる。
いい匂いがする。
しな垂れかかる白いふんわり柔らかそうな髪。
時たまピクリとする猫耳。
ああ艶やかで柔らかそうな唇。
そっと唇と唇を・・・ってやらねえよ！
流石にまずい。
いろいろまずい。
でも今なら子供だって事で。
いやいや、落ち着け。
落ち着いていられるかー！
実はサリアさんの時も、こういった気分になったのを覚えている。
あの時のサリアさん・・・やばっ、余計に意識してしまう。
そ、そうだ、こういった時は素数・・・昨日の事を思い出そう。

あの円盤台は寮にも繋がってて、そのままリタさんの部屋に直行。
可愛らしい人形とキモかわ人形が一体ずつある以外は至って普通の１２畳ほどの部屋。

普通のベッド（どう見てもダブルです）に大きいテーブルが一つ、勉強机が二つあった。
晩ご飯に、リタさんのストックのパンとサラダ、そして俺のステーキと果物を分け合った。
久しぶりの肉だって言ってた、大量に安く購入して節約しているらしい。
アイテムボックス有能ですからねえ。
そしてスキン男の愚痴を何故か聞かされている時にスキン男がいきなり部屋に入って来て一悶着あって、スパークウェーブで矯正したりとか、リタさんはいろいろな村とかを回っていたとか、俺についての話とかした。
そして・・・

「ユウアちゃんのお母さんは・・・おいで」

いやいや、その胸に飛び込んで来なさいポーズは止めて～。

「もう十分泣きましたから」

「子供は無理したら駄目。妹もユウアちゃんみたいに何時も強がってるから分かるんだから、ね？」

まあ、いいか、おいでって言われたんだし、自分から抱き着く訳じゃないんだし。
抱き着いたら頭を撫でられた、暖かい・・・いい匂い・・・まな板・・・。
サリアさんはお姉さんぶりたいお姉さん、リタさんは正お姉さんで手慣れている、安心感がすごい。

ってリタさん明らかに、子供？少年？少女？ハァハァって危ない

人の顔になってる！？
思わずスキン男に当てた威力のスパークウェーブで痺れさせてしまった。
「痛たた、あの時は気持ち良かったのに。妹並の威力ね。妹も抱き着いたらビリビリするのよ、酷いと思わない？」
「・・・自業自得です」
妹さんビリビリ娘ですか。
テンプレだとビリビリ娘はツンデレ娘なのが多いですがどうなんだろうねえ。
そして酷いとか言いいつつも嬉しそうに話す貴女は危険です。
「うう一酷いなぁ。でも何だかユウアちゃんって妹に似てるかも。一緒に寝よう？妹は寝るときは素直なんだよ？」
それは俺に素直さを求めているのか、言い包める為に言ったのか。
唐突だなぁ、まあダブルベットの時点でそう来そうだとは予想してたし、サリアさんで馴れてるからいいか。
何かされると怖いので、一応釘は刺しておこう。
この年で乱れたらヤバいと思うのです。
「変なことしたら一晩中痺れさせますから」
「・・・それはそれで魅力的かも」
何やら危険な事を聞いたような。
この人Ｍか？Ｍなのか！？
で、まあ一緒に寝た訳だが、疲れていたのかすぐに眠ってしまっ

た。

そうだ、この人結構危ない人なんだった。

そしてこれはトラップだ。

キスなんかしたら、実は起きてて、イケナイ事をやらされる羽目になるんだ。

その時、そっとリタさんの目が開き、ようやく生殺しは終わりを告げた。

「おはよ・・・」

ぐはっ！

い、いきなりキスして来やがったー！

「おはようリ・・・あれ？ユウアちゃん！？」

しかもこの人素だよ、誰か・・おそらく妹？と間違えてきたよ、何時も起きてキスしてるのかよ。

「ユウアちゃん驚いてない馴れてる！？妹は最初あたふたしてて可愛かったのに～」

やっぱり妹か、十分驚いています。

どうにか出さないようにしています。

「ごめんね。次から・・・もやっちゃうだろうから気にしないできゃっ」

そう言いつつキスしようとしてきたリタさんにスパークウェーブ使った。

だって、キスだよ？
所構わずキスしてくるようになったら、恥ずかしがり屋な俺悶え死ぬ。
だが、まあ、でも、人前じゃなかったら有り、かも！
あちらがしてくるのならば、俺自身も寝顔を見て迷う必要は無くなった訳だ。
恥ずかしいから、寝ている時にするだけだが。
危ない人だが悪い人じゃあない・・・可愛いし。
案外こっちから積極的にやったらあたふたしそう。

・・・無理、恥ずかしい。

で、またまたテンプレ通りとなった。

「貴女、その子供を離しなさいっ！」

その日、学校の中を案内してもらっている時にいきなり現れたリタさんと同い年くらいの少女。
気が強そうな全身金色衣装金色翼金髪ドリル長身デコ女。
ライバル、正しくは一方的ライバル？
リタさんに敵意丸出し。
リタさんは無視。
俺もリタさんに従おう、関わりたくない人種の臭いだし。

「待ちなさいっ、貴女、その女は・・・っ！」

デコ女が何か言おうとしたら、リタさんからとんでもない殺気。

「そ、そんな殺気立てたって、あ、貴女が手を出さない事は分かって・・・」

こういった相手はずっと無視していればいいのに。
そう思いつつリタさんの手を強引に引っ張ってその場を離れた。
面倒臭いですから。
デコ女は何か言っていたが気にしない聞こえない。

「・・・ユウアちゃん、聞かないの？」

「聞いても聞かなくてもリタさんはリタさんで変態である事には変わらないよ？」

「もうっ、・・・ありがと。・・・私はビトレイマスターの娘なの」

「えっ、ビトレイマスター！？そ、そんな・・・」

「やっぱり言わな「ビトレイマスターって何？」・・・・・・」

「ご、ごめんなさい。もう茶化しません、ごめんなさい」

リタさんに初睨まれ、スキン男のよりもこえ～です・・・。
スキン男顔負けの殺気や睨み、変な人に絡まれる幸薄貧乏ぎみ美少女お姉さん、Mっ気変態キス魔、なんて人なんだ。
にしても言う必要なんて無いのに・・・。
いや、知ってもらう事で安心できるのだろう、本当に茶化してごめんなさい。

で、ビトレイマスターって？裏切りマスター？リタさんの反応的には重要そうなのだが。

「ビトレイマスターは、他国の人が別の国のギルドマスターズに入った人のこと。統計的に殆どの人が悪いこと、物資を自国に横流ししたり有望な冒険者を消したりしてきた結果、ビトレイマスターと呼ばれるようになり、ビトレイマスターとその家族は疎遠されるようになったの」

俺からしてみれば、それは実に、実に下らない事であった。
まあスキン男が念を押すくらいだし、あのデコ女のこともあるから、この世界では相当な事なのだろうが。

「はあー。世界を滅亡にまで追い込んだ大魔王の娘！魔物と人との子供！とかなら理解できるんだけど」

「さ、流石にそれは無い」

「でもビトレイマスターと呼ばれてでもやらないといけない事があってギルドマスターになった、とか考え付くと思うんだけど。それに理解者も一部居そうだし」

「・・・思い付かなかった。今度聞いてみるね」

聞いてなかったのかよ、しかもそんな軽く聞いてみるって。

「それと知り合って間もない人とどうにか仲良くなりたいのは分かるけど、あのスキンシップとか一緒に寝るとか若干危ないというかありえない気がする」

「あ、あれは、その、ユウアちゃん可愛かったし、それに・・・知られたら・・・離れて・・・かもしれない・・・仲良くなった人・・・皆私から・・・ユウアちゃんも・・・思って・・・」

何やら言葉が小さくなっていった。

大方知って尚仲良くなった人は何故か全員リタさんから離れていった、そして俺も同じかもしれないってところか。

同年代または近めの歳の理解者が居ない、できないのかもしれない。

それでも繋がりを求め続けるって、俺には真似できないなぁ。

だからこそ、俺の所為でリタさんを悲しませないようにしたい。

・・・十中八九あのデコ女が裏で何かやっていそう、面倒臭い。

さて、あのデコ女の対処に相応しい魔法は何がいいかな？

出来るかはわからないが、肌を金色に発光させるとかか？

周りの皆困るだろうなぁ。

・・・研究するか。

第17話　変態なのだが（後書き）

ビトレイ（ｂｅｔｒａｙ）裏切る安直です。
またユウアちゃんは基本自分からは手を出せないヘタレです。
そしてリタさんは女性です。決して男ではありません、面白そうだけど。

第１８話　レベルが違うのだが（前書き）

２話同時投稿その１です。
１話にしようとしたら長くなり過ぎて分けました。
いつになったら入学できるのやら。
それは置いといて、お楽しみ下さい。

第１８話　レベルが違うのだが

正方形の敷地内に、５階建の校舎が十時型に存在し、その交点には１０階の八角形の太い柱みたいなのがニョキッと飛び出ていて、頂点は錐型で大きな鐘が中に見えるよう存在する。

５階建の校舎には、医務室や教室、研究室といった部屋があり、１０階の柱内には会議室とか図書館とか転移魔法陣（俺が初めて学校に来た時に乗っていた台）とか学内移動用魔法陣（学移陣）等いろんな重要な部屋が存在する。

柱の中心部は吹き抜けとなっており、フローで移動可能であり、十時型の校舎の各端も同じく吹き抜けで、鉄の梯子が念の為付いている。

フローを使った瞬間他の人には識別できなくなるらしく、上を向いて覗く、なんてことは無意味なのである。

この魔法を掛けた人はロマンってものが分かってない奴だ。

正方形の敷地内の全角に５階建の男子寮女子寮が二つずつ、さらにそれらは庶民寮・貴族寮に別れており、１階に学食購買、中央に学移陣＋吹き抜けがある。

今いる女子寮の方には、何と・・・魔法が掛っていなかったぁー！

感想なんて言うものか！

部屋のドアはホテル並に所狭しと存在するが、中は（おそらく空間魔法で）拡張されていて広いし、住む人数に合わせて広さ変更できるらしい（寮費はその分かさむとのこと）。

教官達もおおよそ同じ寮に住んでいる。

校舎と寮との間は庭が存在し、学校敷地内への入り口は南側に門

と一戸建て二つ分くらの大きさの建物が存在する。
闘技場や集会場等はまた別の場所（別空間と言った方が正しいかも）にあるらしい。
何とも中途半端だ、全部学移陣にしてしまえって感じだ。

ある程度学内を見て回った後、リタさんのスキン男による訓練に参加することになった。
実は来賓者カードの発行が難航していて、学移陣が使えなかったり、部屋を開けることができない為、部屋にいるかリタさんに付いて行くかしか選択できない。
図書館って選択もあるが、学校に入ってからで十分・・・リタさんが一緒にって離してくれなかったってのが最大の理由で、選択肢なんて元から無い。
リタさんはちょっと前に話してくれた内容通りソロでの行動であるが、一応同期の中ではかなり能力的に上位らしく、ある程度の行動は可能で、だけれどやばくなる毎に転移魔法を連発。
転移魔法はかなりのお金が掛かるらしく、今は節約してどうにかやっていけてるらしい。
学校内の教育プログラムについては入学後にパンフを貰えるからと言われ、教えて貰えなかった。

で、最初に俺の大まかな能力を測る為、おふざけなし、魔法無しでスキン男と結局手合わせすることになった。
お互い刃を潰したショートソード・・・って使った事無いっての。
短剣しか・・・短剣も殆ど戦闘で使ったこと無い。
問答無用で仕合が始まった。
仕方ない、取り敢えず相手の斬撃を受けるだけにしよう。

スキン男からして見れば、相手は子供であり、正面から剣を受けようとしただけで、魔法は使えても相手との腕力の差を考えられないまだまだひよっこな初心者だと思ったことだろう。

だが・・・あろうことか、簡単に受け止められたのに加えて、そのまま押し飛ばしてしまった。

「おわっ！？」

「・・・？あれっ？」

スキン男の迫力が凄かったので全力で対応したのだが・・・なんてチートだ。

普段は握力とか普通で、物を握り潰したりすることがないから、戦闘時に力が解放されるのか？

だがここまでとは気付かなかった。

スキン男は転ばずに地面に付けた足で勢いを殺し、再度向かってきた。

数回吹っ飛ばしたら、スキン男はガックリと膝を折り、乾いた声で笑った。

「ははははっ、そんな、ははははっ、昨日の腹いせに、初っ端から本気で、痛め付けてやろうと、思ったのに、ははは・・・」

なんかごめんなさい？

「リタ～、今日は自習だ～」

そう言ってフラフラとしながら何処かに行ってしまった。

えーと、リタさんにもごめんなさい。
リタさんはというと、笑顔のまま動かない。
どうしよう・・・。

「うんっ、魔法の練習にしようか」

気にしないようにしたようだ。

「リ、リタさんはどんな魔法をよく使うんですか？」

「全般ある程度使えるけど、氷系が一番使い易くて使ってるかな。
ユウアちゃんみたいに魔法名のみだと使えないけど」

なんだか言葉に毒が・・・。
白髪のリタさんは魔法全般使えるが、髪から氷系、雪とかの白のイメージ？
似合ってるかも。
そういえば、この前呪文で魔法を使った時あまり上手くいかなかったなあ、何が原因？
ぶっちゃけ、呪文もかなり短めじゃなかったか？
呪文内には、魔法名も存在しないしどうなのだろう。

リタさんは俺を後ろから抱いて、

「世界よ、大地よ、我が白き世界にて制動せよ！」

リタさんの周り半径１０ｍほどの地面が凍り付いた。

「何か置いとけばもっと魔法の威力がわかりやすかったかな？」

やっぱり呪文は短い。
ふむ、俺もやってみよう。

「世界よ、大地よ、我が白き世界にて「だめっ！」制動せよ！」

「ひゃうっ！？あ、危ないっ！呪文は人それぞれなんだから真似ても失敗か暴発するんだよ？教わら・・・まだ習ってないか」

「ご、ごめんなさいっ」

冷気がリタさんを襲ったようだ。
一人ひとり呪文違うのか。
習うまでは魔法名のみのほうがいいかな？
・・・一人ひとり違うのならどうやって学ぶんだ？
まあ、いずれ教わるだろう。

「でも流石に失敗してちょっとほっとしたよ。ユウアちゃんなら使えてしまうかもって「ブリザード」」

反省無し、そして・・・後悔先に立たず。
激しい風の音と共に吹雪が舞い荒れ、闘技場全体が凍り付きだした。
取り敢えず、リタさんを引っ張って学移陣の上に移動。
学移陣の上は魔法の効果も寒さも受けないようだが、何故か魔法も使えない為、外で続いている吹雪を止められなくなってしまった。
リタさんは直立したままで、今だに再起動しない。
心音を聞いてみたが、問題ない。
顔が調度胸辺りなんだからそこに耳を当てるのが一番簡単だっただけで、他意はない。
リタさんでないと学移陣は使えないし、どうしよう。

アイテムボックスは開けたので、サバイバルキットを出してリタさんを寝かせて起きるのを待ったが、起きなかったので学移陣の上でキャンプした。

第１９話　レベルが違い過ぎるのだが（前書き）

２話同時投稿その２です。
文章内には行き過ぎ変態と微エロ表現が含まれている為、苦手な方は回避して下さい。
それではお楽しみください。

第19話　レベルが違い過ぎるのだが

次の日に来賓証を貰えたので、リタさんの訓練の邪魔ということもあり、今日は別行動。
スキン男が俺を見た途端、虚ろな目になるのなら仕方がない。
校舎と寮との間は庭なのだが、今は冬で寒いとあってあまり人がいないくて、一人でぶらぶらしていた。

そこに！
・・・はあー、露出狂が現れた。
コートを羽織った男が１ｍくらいにまで近付いて来て、パサっとした。
いきなりの事で動けなくなっている俺にさらに飛び掛かって来たので、思わず金的。
蹴る瞬間はっと思い、どうにか圧縮空気を足に纏わせてアレとの接触を回避した。
空気を纏ったのが幸いしてか、俺の蹴りでアレが潰れる事はなかった。
・・・この学校にはまともな人はいないのかなあ。

それからは一人でいるときに何かしらが起こるようになった。
が、落とし穴はフローで回避、痺れ罠は踏み潰し、毒の霧は集めてアイテムボックスへ、飛んできた魔法は威力２倍で弾き返し、変態は蹴り飛ばし、ヤンキーは吹き飛ばし、俺目的で行動する相手を誘導して先に仕掛けたりしていた。
そしてスキン男を簡単にあしらえたし、悪ふざけは全て対処して

進めたことから、若干天狗になっていた時だった。
全部正面から突破してやると意気込んでいなければよかった。
彼らはまだまだいい方だった。

奴が現れた。

そいつは最強レベルと言える程の変態・・・シコりながら向かって来たぁぁぁぁ！

魔法で撃退しようとしたが、グレイブは踏み潰され、ウッドバインドは引き千切られ、ストーンウォールは粉砕され、突風でも衰えず、イラプションを走り抜け、油を最終手段でまいた・・・が、フロー＋勢いで優雅に宙を舞いつつ飛んで来た。
臨界点を越えていそうなアレの矛先が俺をロックオンしている。

ああ、俺、死んだ。

逃げておけばよかった。
お母様、サリアさん、リタさん今まで・・・。
って諦めてたまるかスパークウェーブ最大、焼き焦げろぉぉぉ！

俺の渾身の雷の波を周囲に発生させたが・・・呆気なく切り裂かれた。

む、無念・・・。

目前に迫った男が空中で止まっている。
死ぬときに動きがゆっくりになるあれか？

そうだ、最期にアレを殴っておこう
圧縮空気を纏っても無力化してきそうだから、纏わず全力でぶっ潰せ！
あ、そうだ、転移魔法って使えるのかなあ。
学移陣みたいに魔法陣が発動してその中なら・・・あそこは魔法が使えないだけか。

畜生っ！

・・・いったいどうしたというんだ。
何故動き出さない。
あれか、走馬灯をまだ見ていないからか？
そして先程から何故かすごく寒い。
あれっ？
俺動ける？
後ろを振り向いたら・・・無表情のリタさん。
まさか、リタさんがこれを？
助かったぁーあ？リタさん何で動かない？
っ！よく見たら魔力が殆ど無くなってる！？

取り敢えず、あのシコ男が見えない所までリタさんを何抱っこかは言わないが運んで、取り出したのはオレンジ色のピンポン玉くらいの柔らかいボール、グミではない。
名前はそのままオレンジボール。
迷宮で手に入れてアナライズした結果、魔力を５％回復するもので、強い負荷や唾液によって膜が破れたり溶けて飲むことができるらしい。
俺には不要だったが、なんて化学的なんだ。
それは置いといて、ペロッと一舐めして膜を弱め、口の中で弱くなった部分を潰して中身を出す。

もう一個。
もう一個を口の中で潰したら、
「んっ、んんっ、あむっ、んっ、んちゅ、んんっ」
へ・・・？はあ！？
「んっ、んちゅ。・・・ご馳走様」
一体、この人、何なんだーーー！
「な、何を「指に付いてるのを舐めただけだよ？」・・・」
異論は受け付けないらしいが、今のはどっからどう見ても指フェ・・・。
なんでこんなに変態が多いの・・・あれっ？
体がへたり込んでしまった。
どうやらあのシコ男とリタさんによって、腰が抜け砕けになってしまったようだ。
銀色くまさんの時は何とも無かったのに。
ってリタさん、俺をお姫様うあ～抱っこうわ～やめて～。
「さっきのお返しだよ？」
・・・意識あったのかよ。

「で、あのルナはどうなった訳？」

「それが、あの女に邪魔されたようです。それまではルナティックが押していて、目前まで迫ることが出来たそうですが」

「それじゃあもう無意味じゃないっ！かなり出来る女の子だったから、彼を押しかければうまくいくと思ったのだけれど」

「彼の特異魔法はあの女の特異魔法には打ち負ける、それ以前に彼女は二度目なので横槍可能ですから」

「全く、忌々しい女だこと」

補足しよう。

ルナティック通称ルナは特異魔法の持ち主である。

その特異魔法は『変態行動時に、対象によるあらゆる攻撃を無効化』するという迷惑極まりない意味不明な変態補助魔法。

ただし初見少女？しか対象にできない。

そして、対象または周りの誰かが泣き出せば瞬時に萎えて逃げるが、一人でいて強気に出たら被害にあってしまう、また、対象以外からの攻撃は倍になるという設定も存在したりする。

新入生は基本、入学後に上級生が数十日間警戒する為被害に合うことはあまり無い。

もっとも、トラウマになる女子生徒はごく僅かに存在したりする。

「貴女は両方の特異魔法を受け「おだまりっ！！！」」

「危険になったら逃げるし、偶に特異魔法で反撃されるし、魔法を使って意識を失ったと思って近づいたら再度使ってくるし。・・・

次はどうすればあの少女を離れさせられるかしら」

「彼が失敗したとなると学校内ではもう不可能だと思われます」

「そうねぇ、神日中なら街に出るだろうし、一人で行動する可能性もある。今回は捕まえるだけにしておきなさい。犯されて心が壊れた奴隷なんてもう認めませんわ。あの女はあの少女を甚く気に入っているようだから、わたくしの奴隷にして調教して見せびらかしてさしあげますわ、おーほっほっほっほ」

「それと・・・親衛隊の数が減っているとの報告がございますが」

「なんですって！！！」

「あの少女に差し向けた信者達が最初に、それから徐々に抜けているようです」

「わたくしに踏まれ隊ともあろう者たちが、なぜっ！」

「それが・・・除隊した者たちがユウアちゃんに蹴られ隊、ユウアちゃんを見守る会、リタユウ愛好会を発足させたようです」

「きーーーーー！わたくしを差し置いて！すぐに解散させなさいっ」

「それが・・・我々が教育した猛者ばかりですから、難航しております」

「ふっ、あの子を奴隷にした暁には彼らにも見せつけてさしあげますわ、おーほっほっほっほっほ」

俺の知らない所で変態達が騒いでいることなど、俺の知る由もなかった。

第１９話　レベルが違い過ぎるのだが（後書き）

第２０話　おかしくなったのだが（前書き）

忙しくて書くのがかなり遅れています。
なので今回は短めです。
また、平日しんどいので日曜日に進んだ分だけ載せていこうと思います。

第２０話　おかしくなったのだが

ただ今引きこもり中・・・。

部屋の外に殆ど出ていません。
ただひたすら考え中。
だが、思うような結論が出ない。
何のって？
あれだ。

あの日あの後丸一日中リタさんの抱き枕にされたり頬を舐められたり・・・助けてもらってリタさん様々なので言われるがまま抱き枕になっていた、舐めるの好きなようです、遠慮が無くなったようです・・・していた時に、あのシコ男の特異魔法について聞かされた。
聞いた時は、理不尽な魔法だなぁと思っただけだった。
そして抱き枕がしんどくなってきて、どうやって抜け出せるか考えてリタさんを見た時だ。
白い毛に覆われた猫耳が目に入ったのだ。

勿論堪能した。
当たり前だ！

そこで止めておけばよかったのだが、猫耳があるのなら尻尾も？
ってことで攻めてみた。
うん、精神的におかしくなってる。
少し前ならこんなに積極的に出れなかったのに。

「ひゃんっ」

うわっ、いい声～。

猫みたいにしなやかな長い尻尾ではいが、かなり短いふっさりとした犬っぽい尻尾。

素晴らしいです。

病み付きになりそうです。

で、調子に乗って長い間撫で回した時、いきなりリタさんが・・・。

別に怒られた訳では無い。

それならまだよかった。

それならよかったのに。

あの特異魔法が発動したのだ。

聞いた話では生命の危機を感じた時に発動し、時を止めてしまう魔法の様だが、使用者本人のリタさんも魔力枯渇で停止？気絶？硬直？硬直がしっくりくるかな、してしまうらしい。

硬直中で魔力枯渇中であっても、危険が近づけばさらに連続使用可能なのだとか。

ただし、リタさん自身も相手もいつ回復するか不明らしく、また、今回何故発動したかも不明。

大方感情の高まりがってのがテンプレだろう俺のせいだろう。

そして、お互い止まった状態で一日くらい？

動けない・・・が、意識までは止まらなかった。

俺は尻尾を弄るのにリタさんの下半身辺りに抱きついていたので、そのままの状態。

何故か目は乾かなかったが、閉じる事もできなかった。

さらに布団の中だが、光が若干入ってきており、少しだけパ・・・

白いのが見えてる。
さらにさらにいい匂いもずっと感じている。
それはまあ芳しいエサを待て・・・ではなく、エサが前にあるけど鎖で繋がれていて届かなくて食べ　られない犬のようであった。
目を閉じれないと考え事をし辛い、というか目の前に意識が行ってしまい、悶々としてしまう。
長い地獄だった・・・。

そして地獄の終わりは地獄の始まり。
リタさんが先に回復した。
耳とか首筋とか唇とか散々・・・うわあ～。

途中でスキン男がリタさんが来ないので確認しに来た。
おそらく訓練の予定でもしていたのだろう。
スキン男に初感謝だ、ベストタイミングではないが感謝だ。
リタさんは動けない俺の抱きつきからするっと抜け出た。

「ガキはいいのか？」

「まだ寝てるみたいです。はやくやること済ませましょう」

「急かすな、さほど時間のかかる用事ではない」

そして出て行ってしまった。
放置かよっ！？
そして、直ぐ戻って来ると思しきリタさん。
危ないです。
正直、軟禁されてる感じ？これから軟禁？って感じだ。

おそらくあれ以上リタさんの変態が高まる事は無い・・・はずなので、逃げる気は今のところ無いんだよねえ。
だって一人旅するのと少し不自由だけど可愛い女の子と一緒に寝泊まりするのとどっち・・・おお、動けるようになった。
すっげー疲れてる。
尻尾を弄るのは程々にしよう。
にしてもなんてふざけた魔法なんだ。
今後俺の行動次第では再度食らうだろう・・・いや絶対、確定だ。
ならばっ！
ってことで対策を考え始めた。
対策すれば堪能し放題？なのだ！

ついでにあのシコ男対策やデコ女発光化も考えようと思って、いつの間にか寝ていた。
起きた後に帰って来たリタさんががっかりしていた。
かなり時間がかかったようだ。
何か知らないが助かった。
それから、部屋の外に出ずに引きこもって考えていたのだ。

別に外が怖くて出れなかった訳ではない・・・。

第２１話　考えがまとまらないのだが（前書き）

章の名前と第１４話タイトルを少し、第１９話固有名詞一つを改正しました。

第２１話　考えがまとまらないのだが

不可能じゃね？
リタさんの特異魔法に対してそう思った。
発動の瞬間すら感じられなかったのだ。
同じような魔法を使える人や魔物がいたとしても、相手か使えるかなんてわかるはずがなく、近づかれた時点でアウト。
もし魔物であれば、全ての魔物を近づかせないように遠距離から倒せばいいが、人全員を避けるなんて本当の引きこもりにでもならない限り無理。
時間を止める魔法を適当に使ってはみたが、全く反応無し適正無し。

なので他のを片付けようと思ったのだが、デコ女発光化計画は第一試験できない。
自分に掛けて戻らなかったら嫌だし、動物実験なんてやりたくない。
そもそもこの世界に動物とかペットとかっているのか？
魔物を使うってのもアリなんだが、わざわざ迷宮まで出向いてするのなら別の魔法を考えたほうがいいと思う。
肌を変色・・・紫外線で焼いて色黒とか？
紫外線は簡単に出せた。
光の波長をちょいちょいっと弄れば即完全、やりすぎると危険なんだけどね。
自分で試してうまく一部焼けた。
だが発光や金色化も捨てられない！
安直に金箔とか貼付け・・・うんっ、金なら何処かで手に入るだ

ろう。
それも候補に入れよう。
そして最後のシコ男みたいな相手対策。
魔法無効化なんてよくありそうな設定だが、簡単そうで難しい。
魔法自体を消し去るのならばお手上げだが、ダメージを受けないだけとかなら何とかなると思ったのだけど。
属性魔法はいろいろと考えたが・・・ぶっちゃけどれも力技で破られそう。
物質系の魔法が若干障害として使える程度。
相手の能力限界を越えた威力とかの魔法でってのはテンプレではあるが、失敗しそう。
誰か転移魔法が使える人がいれば、超高威力の魔法を使って即おさらばできるけど、下手したら威力が高すぎて巻き添え食らうし、お金も掛かる。
メテオ系は一応土属性で、今のところ一番威力がありそうだが、威力制御や目標設定が難しいんだよねえ。
あれは自由落下で威力を高めていて、空気抵抗とか摩擦によるエネルギー消費とかを含めた威力計算なんて専門外。
一発一発威力を測定すればいいのだが、面倒臭い。
メラ何とかではない、メラだ、だったか？
魔法の質を向上・・・魔力消費を増やしたらその分魔法が大きくなった。
イメージが『威力＝大きさ』になってしまって難しい。
例えば、山火事程の炎とライター程度の炎、どっちが高威力かなんて聞かれたら前者だと思ってしまう。
まあ、要研究だ。
ならば原理魔法ならばどうだろうか。

まずはお馴染みって程ではないけど潤滑油。
前回は近くで使ったせいで飛び越えられたのだが、魔法が効かないとわかった時点で使うのは有りかな。
わざわざ飛び越えたって事は引っ掛かる可能性が大きいし。
でも材料の消費が激しいので、最初から使いたくはない。

液体窒素。
コストはほぼ魔力のみ。
大気中の酸素と窒素は殆ど材料を消費しないことが確認できた。
なので安価で一番いいかもしれない。
煙幕としても使用可だ。
ただし、下手をすると殺してしまう、凍傷もしくは凍結粉砕、窒息死で。
そして時と場所による。
狭い空間だったら自分も被害に合う可能性があるからだ。
既に手を汚した事のある俺にしてみれば躊躇いなど不要なのだが、やはりできれば穏便に済ませたい。
屑だって感じたら、でいいかな。

普通に撤退又は戦闘不能にさせるにはどうしたら・・・。
危ない物質・液体はどうだ！

催涙性物質や強烈な溶液。
・・・突っ切られそう。

臭い物。
俺が嫌だ。
でも臭いチオール（硫黄）系物質は戦意を削ぐには最適かも。
だが硫黄は材料が少ない。

シアン化水素。
お互い死ぬ。
材料消費かなり小。

アミン系化合物。
アンモニアは臭すぎるから嫌。
ピペリジンは男のアレの臭いなので、普通の男ならば効果大のはず。
数日間体中からアレの臭いがする羽目になるんだから・・・。
服に掛かっただけで最悪だった覚えがある。
カマや変態には逆効果かもしれないし、臭いまま近づかれたくない。
お姉様方（経験者）は、冷たーい目をしそう。
少女達（未）は、教えたら赤面しながら怒ってきそう。
想像してみる・・・へへへ・・・、・・・変態！？
少女がアレの臭いを私生活や学校で振り撒いたら、虐められて引きこもって最悪自殺しそう。
うんっ、これからのデコ女の行い次第では・・・むしろ真っ先に、かな。

うーん、調度いいもの他にないかなあ。

単純に閉じ込めたりとかは？
破壊されそ・・・おお！
バインド系とかウォール系の魔法だと弱くて破られるけど、もっと強固に大量に使用すれば。
例えば土石流で土を大量に被せて、その時点で固定。
似たようなのを忍者漫画の瓢箪持ってる砂使いが使ってなかったっけ？
でもそれだけだとダメだな。

何度か連続で被せて且つ、中を水で満たせばうまく力を発揮できなくなって・・・死んでしまいそうだから、ここは臭い物質だな。
魔法名はどうしよう。
似たような土属性魔法『グランドダッシャー』は、大地を激しく起伏させてぐっしゃぐしゃにする魔法、それの別パターン魔法ってことで同じ名前にしよう。
土石流の波にサーファーみたいに乗るのも楽しそうだ。
あっ！迷宮内を波乗りして突き進んでみたいなあ。
おっ！フローで浮いて迷宮内の魔物全て水没&渦潮でアイテムを真ん中に全部集めて回収。
メテオスウォームよりいいかも。
あれって幾つかのクレーターを回らないといけないんだよねえ。
魔法の創作って楽しい。
他どんな・・・何を考えてたんだっけ？
そんなこと考えながら数日間部屋に閉じこもっていた。

第２２話　高性能ではあるのだが

数日後、「これだ！使役魔法だ、これならリタさん対策になりそう。止まった後独断でフォローしてくれる存在がいればいいんだ」って事で、その他いろいろ調べる為に図書館に向かった。

・・・リタさんと手を繋ぎながら。

リタさんに図書館行くって言ったらこうなった。

若干外が怖いので、行くと伝えたらついて来てくれるかなーなんて、そこは思惑通り。

で、部屋の外に出たら魔力感知でそこかしこに六人パーティーらしき団体が。

でも何故か殆どのグループが止まっている。

校舎に入っても同じ・・・その中にあの変態シコ男の魔力がっ！

一人一回のみと聞いてはいるのだが、やっぱり嫌だし、他にも変な奴がいるかもしれないので、警戒だけしておこう。

って、後ろから隠れてついて来る！？

先手を打つか？

いや、まだ練習して魔法の問題点を探していないから、ここは逃げるべきだ。

「大丈夫、話は付いてるからいきなり襲われることはないよ？」

「へっ？」

不安を感じとったのかリタさんはそう言った。

一体何時の間に、そして何を話したのだ。

さらに、話がついているならわざわざ手を繋いで歩く必要ない・・

・。

何事も無く図書館に着いた。
後ろは気にしない。
中には受付らしきものは無く、本も無く、グループ用机と一人用机が仕切で区切られて沢山あるだけのようだった。
リタさんに促されて、グループ用の大きな机のところに行った。
六人用の机には角の四ヶ所に、小さな金属板があった。

「これはサーチブックで、この金属板に学生証を付けるとブックオフィスで本を探せるんだよ。出るときは同じように学生証を付ければ出られるよ、一回入って出てみて」

探せる？入る？出る？
まあやってみるか。
俺はアイテムボックスに仕舞ってあった来賓証を取り出して金属板に当てた。
すると瞬時に場所が移り、六人用の机一つと本棚が大量にあった。
すごい量。
検索システムとか無いのかな・・・無い！？
辺りにはそれらしきものは無かった。
転移魔法とかはあるのに中途半端だ・・・一体どれだけ探し出すのに時間が掛かるのだろうか。
取り合えず近くの本棚の本を適当に取った。

背表紙にはタイトル、表紙には内容が記載されていた。
タイトルは『俺様』、内容は『俺様』。
・・・。

何故か本が開けないっ！
隣だ。

『ワシの孫』
『ワシの孫が可愛い過ぎて思い出を書き綴ったのじゃ。ある日を境に口を利きいてくれなくなり、数年後ワシを置いて逝ってしもうた』
・・・・。
本が開けないっ！
隣！

『角命！』
『さあ君もこの本を読んで、角の素晴らしさを学ぶのだ』
（注：読み辛いので文書は全て脳内変換してあります）

・・・ここって図書館だよね？
周りを見ると、棚にジャンル『自著伝』と書いてあった・・・。
学校の図書館になんでそんなジャンルが。
一旦出ようか、リタさん待たせてるし。

『角命』を持って出たら横にリタさん。
あれっ？何で手を繋いだままなんだ？そして本は何処に行った？

「ふふっ、戸惑ってるね。そんなユウアちゃん滅多に見れなさそう。本は持ち出そうとしたら自動でアイテムボックスに入って、十日後に自動で返却されるんだよ。本と学生証をくっ付けたら、有料で複製もできるんだよ。そしてそして本を探している間は長いけど、何と！？出たら時間が経っていないんだよ。すごいでしょ」

確かにすごい、すごいのだが・・・。

「検索はできないの？何で中で読めないの？中で本が読めたら現実で時間が掛からないのに」

「・・・実はあまり使わないし、知らないんだよね」

そう言ってリタさんは頬を掻いた。

ストーカーっぽい団体以外では、図書館には数名しかいない。

この世界ではあまり本って読まないのかな？

「ま、とにかく、訓練が終わったら迎えに来るね。でも変なのが来たら直ぐに逃げること！いい？」

そう言ってリタさんは行ってしまった。

急に心細い。

まあ、本を読みますか。

で、変なのはやっぱり来た。

「わたくし、オイスター・ノインヒラガキと申します、可憐なお嬢様。よろしければご一緒してもよろしいでしょうか」

「嫌です」

こいつ、おそらく貴族。

紫色の髪をした美少年、凛とした赴きの中に少しだけ幼さを残していて、お姉さま方がきゃーきゃー言って来そうな感じ。

無視すればよかった。

けっ！どうせ俺は男っぽくないですよ、美少年なんて消えてしま・

・・こいつっ！いきなり俺の手を取ってきやがった。
勿論痺れさせたのだが、鳥肌が立った。
「ふふふ、そう反応されると余計に燃えますね」
・・・逃げようか。
「そうだ、どうですか？お近づきの印に。これは貴族ですら滅多に手に入らない貴重な品なのですよ」
そう言って取り出したのは厳重に包装されたトリュフチョコレートみたいなものが入った高級そうな木箱。
おおー、チョコレートだ美味しそー。
・・・。
なんて言うわけ無いだろ、この大根役者が。
話がいきなり飛んだし、あからさまだし、何より演技だってのがばればれだ下手くそ！
第一他人から貰った物を真正直に食べるかっての。
大方睡眠薬とかが入っているとかだろう。
先程から俺は目を輝かせて箱を見ているのだが、勿論演技だ。
そして、大根男よ、俺の演技をとくと見よ！
「これっ！いいの？いいの？」
「勿論ですよ」

ハイテンションで俺は一つを手にとって・・・

「はい、あ～ん」

「あ～ん」

こいつ、慣れてやがるっ！

よくあ～んってやっているのだろう。

そして馬鹿か？馬鹿なのか？

何度か租借した後で口が止まり、何処かに走り去っていた。

本気馬鹿のようだ。

同時に俺をストーカーしていた奴らも、追いかけて遠ざかった。

厄介払い出来ただけ良かったかな？

置いていった残りは貰っておこう。

アナライズで見たところ、惚れ薬入り。

・・・お互い事故に合わなくてよかった。

それよりもアナライズって一般的ではないのか？

まあいいか。

惚れ薬を魔法で取り出して仕舞い、一つだけご馳走様でした。

そして本を借りるだけ借りて部屋で読もうと思い、ブックオフィスに入った。

「くそっ」

ある程度離れて止まって、薬を飲んでそう吐いた。

飲ませようとした薬はかなり高価な惚れ薬で、飲んだのは止める

鎮静薬。
計画ではどうにか飲ませて持ち帰る算段だった。
「・・・あなたが、こんなに演技が下手だとは思いませんでしたわ。あれでよく自分なら可能だ、なんて言えましたわね。そういえば昔から貴方は相手が寄ってくるばかりで口説いたことなど皆無でしたからねえ」
「ひっ！」
大根男はあのデコ女に意見していた男で、一応婚約者同士だったりする。
力関係はご覧の通り。
そして、デコ女は相手とのやり取りを行う道具で一部始終を聞いていた。
「そうねえ、神日まで迷宮に籠って損失分を稼いで貰いましょうか。でもその前に」
そう言って大根男を殴り倒し、アレを思いっきり踏みつけた。
「ぎっ、やっ、やめ・・・」
言葉にならない叫びが響いた。
そして数分間ねじり踏んでデコ女は去って行った。
「ううっ、ちくしょ・・・おっ、お前らはっ」
表れたのは先程のストーカー達。

しばらくお待ちください。
・・・・。
もうしばらくお待ちください。
・・・・。

「災難だったな」

「そ、そういうお前も俺を殴っただろうがっ。そもそも何でお前が親衛隊のあいつらと。答えろルナティック」

大根男の元に現れたのはあの変態のシコ男。

「その名を呼ぶな。本位ではない」

「ふっ、襲ったのは事実。皆にばらしてもいいのだぞ？」

「ふんっ、既に教えた」

「なっ！」

「そして彼らが常に俺と共に行動する限り、俺を止めてくれる。だから貴様の脅しはもう通じんぞ。むしろ俺と言う駒を失った事を教えても良いのだぞ。次は何をさせられることになるのやら。最悪捨てられるかもしれんなあ」

「くっ、何が望みだ」

「なあに、そちらの動きを逐次教えてくれればいいさ。それに、二度目は無いとは言っているが、正確には襲う気力が出ないだけで、無理やり対象にすることも可能なのだぞ？」

「・・・わかった」

「全く、あの女のどこが好きなのやら」

「・・・」

「ま、これから頼むぞ」

そういって、ルナティックは場を離れた。

「・・・貴様たちに彼女の何が分かる・・・」

大根男は呟いた。

その想いが語られることは・・・多分ない。

第２３話　魔物らしくないのだが

「明日一緒に迷宮に行かない？」

本を読んでたらそうリタさんが言ってきた。
何でも一人だと難しくて手伝ってほしいらしい。
ま、外に出るのも慣れてきたからついて行きますか。

で、手を繋ぎながらとある教室に向かった。
何時の間にか手を握られていた、そして振りほどけない・・・。
教室の中にはスキン男がいたが、スルーしてリタさんに何で教室なのか質問。
何でも教室内の学移陣から迷宮に行くことができるとのこと。
それくらいではもう驚きはしない、と思ったのだが・・・

「学校だけで数百もの迷宮があるんだって」

「数百・・・」

「それで、今回のクエストは魔物のドロップアイテムが必要なんだけど・・・」

「だけど？」

「す、進めばわかるからっ」

学移陣に乗って迷宮に入った。

おおー！

５ｍほどの幅の道が続いていて、天井を含む周り全てが石！

そして何故か明るくて、曲がり角が直角にあるのが見える。

人工迷宮って名が相応しい気がする。

で、スキン男は何故ついて来る？

「はっはー、リタがガキと迷宮に入ると聞いて、罠に嵌まるところが見られるかもしれないんでな」

何も聞いてないっての。

「リタさーん」

「あはは、教官に相談したら・・・」

まあいいか。

少し進むと複数の魔物の反応が。

そこには、

猫戦士×３

猫騎士×３

猫魔術師×４

猫プリースト×１

二足歩行でスケイルメイルを装備し、勇ましく小さな斧を構え、勇ましく敵を見据えるブチの猫戦士。

二足歩行でプレートメイルを装着し、凛々しく小さな槍を前に突

き出し、凛々しく敵を見据える金色の猫騎士。
彼等の後ろで、二足歩行で黒ローブを羽織り、全てを吸い込むような闇を放つダークワンドを携え、全てを吸い込むような暗い目で敵を見据える黒い猫魔術師。
同じく後ろで、二足歩行で白ローブを羽織り、全てを見透かすような光を放つクリスタルロッドを携え、全てを見透かすような目で敵を見据える白い猫プリースト。

可愛いぜ畜生っ！
普通の猫の１．５倍位の大きさで、戦士系は顔以外どこぞのお供にゃんこに似ている。
蹴りたくなってきた。
そしていきなり数が多過ぎ。

「はうっ、やっぱり・・・戦えないっ！」

可愛くて倒せないらしい。
わからないこともないけど、ターゲットなのかな。
よく見たら実は全員震えているので、保護欲がすっごく駆り立てられる。
・・・ペットにできないかな？

「ワーキャッツはその愛くるしさと逃げの速さで「ウッドバインド」・・・」

地面から木の根っこを沢山生やして・・・くそっ、猫だから素早い。
だが鈍臭い白猫一匹の束縛に成功。
他の猫達が必死に仲間を助けようとしている。

「ハク、今助けるぞ」

「くそっ、何で、何でハクがっ」

「わ、私達が囮になるからその間に」

「これ硬いっ」

「私を置いて逃げて！皆殺されちゃう！」

「ばかやろう！んなことできる訳ねーだろ」

「・・・束縛したということは直ぐに皆殺しは無いはず」

「束縛されてるハクも可愛い」

「ちょっ、変なトコ触んないで！」

脳内でそのようなやり取りが続いていた。

どうしよう。

ペットは欲しいけど、引き離すのもどうかと思う。

・・・全部捕まえよう！

「ウッドバ・・・」

ワーキャッツは逃げ出した。

この薄情者ー！

「フルフレイズ」

逃げていくワーキャッツに放ったのは高速火炎連弾、そして任意の場所でエクスプロードを発生させ　る広範囲爆撃魔法である。
創作魔法の一つ、在り来りだけどね。
ワーキャッツは避けられなかったようだ。
あれっ？
何もアイテムを落とさなかった。

「・・・ユウアちゃんだから気にしたらダメ、気にしたらダメ・・・うんっ。ワーキャッツ自体は沢山出てくるけど、すぐ逃げるしアイテムは落とさないから無視して進めばいいよ。でも、奥にいる目的のワーキャットキングの周りに大量のワーキャッツがいて、手出しできなかったんだよね」

逃げるって、それでいいのか迷宮の魔物よ。

「おい・・・そいつはどうするんだ？まさか連れて帰るとかか？」

「それ以外に何か？」

「はっはー、無知なる後輩（予定）に教えてやろう。魔物は迷宮の外に連れだそうとすると消滅してしまう。そうだな、倒せないのなら俺がトドメをさしてやろ「カチッ」う？」

意気揚々と白猫に近付こうとしたスキン男だが、トラップを踏んだようだ。
スキン男の足元が見事に凍り付き、固まった。
発動元はリタさん。
リタさんって結構感情的に魔法を発動させるタイプか？

「ユウアちゃんっ、この子何て名前にする？それよりもどうやって

連れ出す？」

リタさんの目が尋常でないくらい輝いている。

俺はウッドバインドを操って木の籠（檻とも言う）に白猫を入れた。

白猫は隙間から顔を出してどうにか逃げようともがいている。

「全く、逃げたら爆撃されるだけだってのに」

そう言うと白猫は動きをピタッと止めた。

言ってること分かってる！？

白猫と目を合わせる。

白猫はそっと目を泳がせた。

これは・・・かなり知能がありそうだ。

「入り口から出る、出口から・・・出口って何処に繋がってる？」

「出口は教室に戻れるよ。うーん・・・「「転移魔法？」」

被ったー。

在り来りだけどやってみるだけやってみますか。

「だけど私お金が・・・」

「僕って使えるかな？」

「わからないけど・・・お金、大丈夫なの？えーと、多分3万ノットなんだけど・・・」

「ちょっと待てー、使えないし第一転移魔法でも失敗したって例が

あるっ！」

「お金は・・・大丈夫。使えなかったらリタさんに支払うよ」

「それは・・・うんっ、やってみて」

二人で戻るため、片手で籠を持ちながらリタさんと手を繋いだ。

「俺の話を聞「リスクール」待てっ！俺を置いてくなーーーーーー！」

男の叫びが虚しく轟いた。

第２４話　ご都合主義なのだが

結論！
転移魔法でお金は減らなかった、そして、白猫はカード化した。
セラミックっぽいカードの中で小さな白猫が動いている。
出し入れはどうやるんだろう。

「全く、とんだ激レアアイテム持ってるとは。しかもワーキャットなんかに使いやがって」

スキン男も転移魔法で帰ってきたようだ。

「それとリタっ、おいリタっ、聞いてねえ・・・」

リタさんさっきからカードの中をひたすら覗いている。

「リタさん・・・いる？」

「えっ？いいの？だけどその、うーん、ほ、本当にいいの？」

「たまに遊ばせてね」

「う、うんっ、ありがとっ」

すっごくはしゃいでいる。
まあ、猫は残念だが嬉しそうなリタさんを見てると俺も嬉しいし。
それと、聞くだけ聞いとかないとね、教えてくれるといいのだけ

れど。

「で、転移魔法使えないのだっけ？他にもいろいろ聞きたいのだけど」

「わ、分かったから。ただし、二つだけ約束してくれ。転移魔法は使・・・極力使うな、そして俺を魔法で固定して迷宮に置いてくな！頼むっ！」

命令系だが、何やらイニシアチブを取れそうな予感。

「説明求めます」

「ぐっ、・・・お前の転移魔法代、お前の場合は来賓で１０万ノットで、使ったら俺が払うってことでどうにか来賓証を発行して貰ったんだよ。それと、俺は魔法を殆ど使えないから迷宮で固定されると転移魔法しか手段がなくなるんだよ。教官の代金は５０万ノットだっての。ただでさえ嫁より稼ぎが少ないってのに・・・だからっ、頼むっ！」

先程の転移魔法代、合わせて６００万円！？

それを即出せるってことはかなり高収入？

まあ、人を貶める趣味なんてないから自重しますか、変なことしなければだけど。

「変なことしないのなら構わないけど、他に質問いい？」

俺は早速質問を・・・

「この子出せないのっ？」

リタさんから質問が飛んできた。
話だけはしっかりと・・・ちゃっかりと？聞いていたようだ。

「リタっ、お前まで！」

スキン男をじっと見つめる俺。
ええ、リタさんの味方です。

「ちょっと待て！・・・まずは名前を付けろ。それでカードの持ち主となるはずだ」

「えっ？あー、うー、ユウアちゃんお願いっ！」

「パス」

メンドイ。
シロとかハクとか在り来りなのしか付けれないし。

「うー、それじゃあ候補挙げるからそこから選んで！・・・、うーん・・・」

待つ間に他の質問していようかな？

「ユリ、ユーリ、ユリィ。うんっ、どれがいい？」

速っ！
しかもユリって・・・花の方じゃないこと希望。
名前の由来はユウア、リタの頭文字から、らしい。
親が自分達の名前をもじって安直に子供に付けるような名前・・・

恥ずかしい。
天然だよね？
百合はパス、ユーリはゲームの某剣士とか某船長とか強めのイメージがあるから却下、よって消去法で決定。
・・・ゲームやりたくなった。

「ユリィかな」

「分かった、ユリィ！」

名前を呼んだら名がカードの下あたりに刻まれた。

「次は、『出でよユリィ』『戻れユリィ』で「いでよユリィ！」・・・出し入れできる」

リタさんが即呼び出すと、スッとカードからユリィが出てきた。
ユリィにほお擦りしているリタさん。
・・・べ、別に嫉妬とかしてないし、取られた、とか思ってないし。
それにしても、白っぽいリタさんが白いユリィを抱いているのは絵になる。

「あのカードは？」

「あれはマスターカードと言って、魔物を捕獲できる激レアアイテムだ。滅多に手に入らん。買おうとしても一枚１０００万ノット以上。弱い魔物一匹なんて大抵釣り合わん。基本はもっと強い魔物を入れる。もっとも、魔物を生け捕りにして迷宮外に運び出すのが最も大変なのだが」

マスターなボールみたいな物のように簡単にはいかないってことか。

「中の魔物は倒されたら死ぬ？餌とかは？」

「倒されても魔物の力に応じて数日間使えなくなるだけだし、餌も不要だ」

「強くなったりとか進化したりとかは？」

「一緒に迷宮で戦えば強くなるし、上位種への進化もある」

「カード以外でもある？」

サリアさんにあげた銀毛入りクリスタルはどうかな？

・・・あれ？

アナライズで鑑定しておけばよかっただけじゃね？

「カード以外は聞いたこと無いな」

「そう・・・次は転移魔法について。料金とか」

「転移魔法は、学生は入学一年目１万ノット、二年目は２万ノットと増えていき、進みが遅いと最大１０万ノットとなる。進学は個人の知識・技術の習得具合によるが、お前なら・・・最短三年で卒業できるかもしれん。まあ、教官は５０万ノットで破格だが、教官なのだから仕方がない。来賓は１０万ノットで基本個人持ちだ。それと、転移魔法で複数人同時に利用しようとすると、一番上の人の料金となる。俺を含んで連発なんてされたら・・・だから、頼む、頼むからあまり使わないでくれ！」

なるー、新入生を後ろに配置して転移魔法安いうまー、なんて考えたができないってことか。
でも誰が使うか揉めそうな魔法だ。

「ハゲと魔法が使えないのは関係ある？顎鬚は黒っぽいのに」

そう、改めて見たら顎鬚、髭、眉毛が黒っぽいのだ。
初めて見た黒い毛だが、全く違和感がなかった。
ハゲで強調されているはずなのに。
そして、ハゲたせいで魔法が使えなくなったとかだと将来が心配だ！

「・・・・・・」

長い沈黙。
流石に不躾だったかな？
おもむろにスキン男が動いた。
顎髭を摘んで、ペリッと・・・。
付け顎髭っ！？勿論髭も眉毛も。

「笑いたきゃあ笑うがいいさ。どうせ俺は昔から毛が生えたことがないっての・・・」

何と言うか悲壮感？
もうあまりからかわないであげよう、苦労してそうだから。

「今後気をつけます」

「ごめんなさい、教官・・・ユウアちゃん、今日は一旦ここまでに

して、部屋に戻ろうか」

「お、お前ら～」

スキン男男泣き。

一人にしておくか。

部屋に戻って俺もユリィと戯れたいし。

教室を出ようとして思い出した。

「あっ、リタさん、クエストは？」

「あっ・・・」

再び迷宮に向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2954y/

魔法と異界と転生者

2011年12月12日00時45分発行